

第1章 インダス文明研究の現状と課題

1 インダス文明関連遺跡の分布

インダス文明について説明するとき、必ず挙げられるのがその範囲の広さである。文明期の遺跡に限っていうと、北はアフガニスタン・バダフシャン地方のショールトゥガイ遺跡、東はインドのガンガー＝ヤムナー・ドーアープ地方のアーラムギールプル遺跡、南はグジャラート州のソームナート遺跡、西はパキスタン南部マクラーン地方のソトカーゲン・ドール遺跡によって確定されるその範囲は南北約 1550km、東西約 1800km に及ぶ。メソポタミア文明やエジプト文明に比較してもその範囲は広大であるが、なぜインダス文明がそれほどまでに広大な地域に展開したのかという問いかけがなされることは少ない。

なぜ、どのように広大な版図をもつインダス文明が成立したのか、逆に言えばどのような過程を経て広大な面積にインダス文明が広がることになったのか考えてみる必要があるだろう。それは先文明期における地域社会・文化と文明社会の形成過程に対する問いかけにほかならない。

インダス遺跡の数は G.L. Possehl の集成 (Possehl 1999) の 2502 遺跡にその後確認された遺跡を加えて約 2600 遺跡に及ぶ (図 1)。だがその分布は一様ではなく、地域ごとに偏りがあるのが実際である。また、時代によっても遺跡の分布には違いがみられる。こうした遺跡分布の偏差の理由については一つには遺跡分布調査における粗密が挙げられる。例えば、パキスタンの西半部に広がるバローチスターン高原では、1920 年代末に A. Stein が分布調査を実施したが、その後訪れられたことのない遺跡も数多く存在する。また、パンジャーブ平原では農地の開拓が進み、それに伴って多くの遺跡が破壊されてしまったという状況もある。インダス川流域では厚い沖積層によって遺跡が埋没してしまったのではないかとする考えもある。逆にインドのハリヤーナー州やパキスタンのチョーリスターン地方では精力的な分布調査の実施により数多くの遺跡が確認され、地図上に位置づけられている。

こうしたさまざまな理由から現在知られている遺跡の分布をどのように読み解くか多くの問題点が存在するのも事実である。その一方で、当時の遺跡分布の実際が反映されている可能性も十分にあり、諸々の制約を念頭に置きながら遺跡の分布を考える必要があろう。

このような経緯のもとで確認されてきた約 2600 ケ所の遺跡は、当然のことながら、その規模に違いがある。それは遺跡の性格の違いを反映しているが、遺跡における人々の活動の内容と期間に起因する。都市であれば当然人口と居住域の規模は大きくなるし、また遊牧民

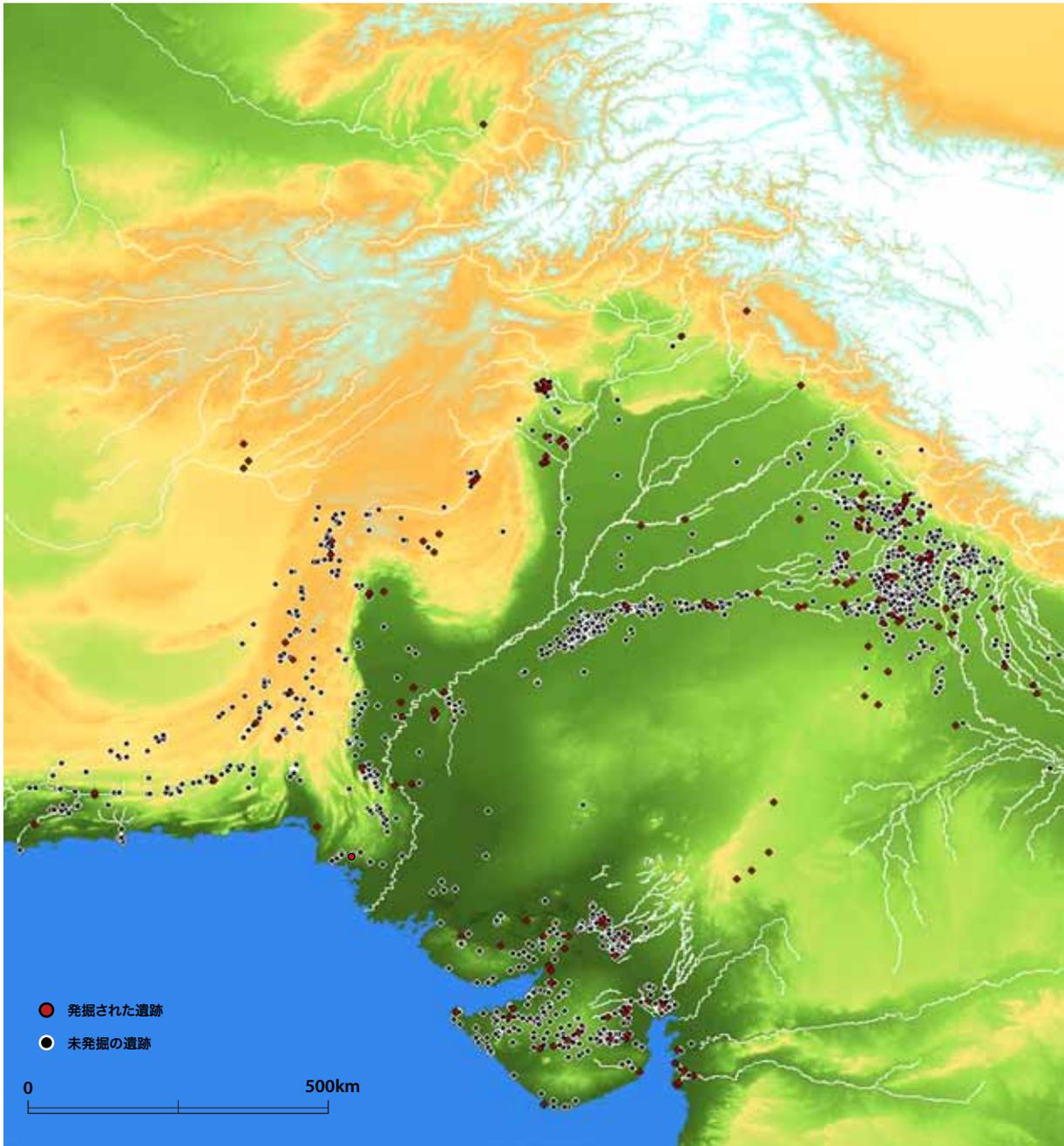


図1 インダス遺跡および発掘調査が実施された遺跡の分布

のキャンプサイトであれば規模は小さくなる。また、活動の規模が大きくなればなるほど、遺跡に残される痕跡は濃密になることはいうまでもない。

逆に、規模が小さいからといって、その遺跡の重要性を低く見積もるのも問題である。小規模遺跡での発掘の結果、範囲は小さいながらも濃密な生活の痕跡が確認されている遺跡も多い。逆に大規模な遺跡でも、発掘調査を実施してみれば長期間におよぶ比較的小規模な生活の痕跡の累積であって、結果的に範囲の広い遺跡が形成されることになった可能性も十分にある。

遺跡の分布調査は遺跡の所在のみならず、遺跡の性格を推定するに足る情報の取得が理想的であるが、これまでの分布調査では必ずしも実行されていないのが現状である。遺跡の規模が

不明であったり、そこで採集された遺物の詳細が不明であったり、時期の特定すら第三者には不可能なケースも少なくない。先文明期からポスト文明期へといたる各地の文化編年はけっして確立されているとはいいがたい状況にあり、分布調査の報告で提示された遺跡の時期には誤認が含まれている可能性を考慮せざるを得ないのが現実である。

いかに現存する遺跡を記録し、研究の素材としていくか、分布調査の方法論の確立が求められるところである。少なくとも、遺跡の規模と表面採集資料の詳細な記録化は不可欠である。その上で遺跡の性格の推定と分布が意味するところの理解を進めることによって、インダス文明が広大な範囲をもつ意味を理解することが可能になるであろう。

2 遺跡の発掘調査の現状と課題

約 2600 ヶ所のインダス関連遺跡のうち、発掘調査が実施された件数は 147 件である。この数を少ないと評価するかどうかはさておき、遺跡によって発掘調査の方法に大きな差異があることは事実で、結果としてインダス文明の理解に大きな影響を及ぼしている。

まず、発掘遺跡の分布を現在の行政区画別にみると、インド共和国ではジャンムー・カシュミール州 2 件、パンジャブ州 18 件、ハリヤーナー州 14 件、ラージャスターン州 12 件、ウツタル・プラデーシュ州 9 件、グジャラート州 37 件、マハーラーシュトラ州 1 件、パキスタン・イスラーム共和国ではパンジャブ州 4 件、北西辺境州 11 件、シンド州 10 件、バローチスターン州 22 件、アフガニスタン・イスラーム共和国では 4 件となっている。この数の違いは主に現地研究者の研究・調査活動の粗密によって引き起こされている。例えば、パキスタンでは伝統的に外国人研究者による調査が主流で、現地研究者による調査が少ないことから、結果として全体的に発掘件数が少なくなっている。逆にインドでは現地研究機関による調査が活発に行われてきた経緯があり、発掘件数が多くなっている。ただ、その中でも州ごとで研究機関の活動に差異があることから、必ずしもその地域の現存遺跡数に比例している訳ではないことは注目されるであろう。また、近年ではパキスタンにおける政情不安に起因して外国人研究者もインドでの調査にシフトする傾向があり、インドでの調査件数の増加をもたらしている。

調査件数の違いは当然研究素材の量に影響を及ぼすことになる。当然それは研究の質にも関わってくることになるが、情報量の多寡は各地域の文化編年や文化内容の理解にも偏差を生じさせる。各地域等しく調査が行われ、情報量に一定性があるのが理想ではあるが、先に述べたような事情から望むべくもないことであり、いかにそうした情報量の差異を考慮しつつ、文明社会の全体像を描いていくかが求められるところである。

発掘調査に関する今ひとつの問題はその方法論の違いである。南アジアでは英国統治期の

19世紀後半にインド政府考古局が設立され、A. Cunningham が初代長官に就任したことはよく知られている。Cunningham 自身は遺跡の分布調査と、諸々の文献資料との相互検証に重点を置いていたので、発掘調査が研究方法の主流となることはなかったが、1902年にインド帝国総督 Curzon の要請によって考古局長官に就任した J.H. Marshall の指揮下で数多くの遺跡の発掘調査が実施されることとなった。あわせて写真という新たな記録方法の導入もあいまって、発掘調査による研究素材の取得という研究方法が一般化することとなった。Marshall の精力的な研究意欲は歴史時代の都市遺跡であるタクシラー遺跡の調査として顕現することになるが (Marshall 1951)、1920年代に併行して進められたハラッパー遺跡とモヘンジョダロ遺跡の調査も Marshall の卓越した指揮力に帰せられるところが大きいであろう。

Marshall の指揮によるモヘンジョダロ遺跡とハラッパー遺跡の調査、その成果に基づくインダス文明の研究は、同時期のメソポタミア、エジプトでの調査とも連動して、古代文明研究に拍車をかけることとなった。その結果の一つとして、メソポタミアおよびアラビア半島で豊富な調査経験をもった E.J.H. Mackay がモヘンジョダロ遺跡の調査に招聘されるなど、古代文明社会に対する当時の最新の知見と調査方法が南アジアの考古学研究にもたらされることになった。

ただし、発掘調査の方法とその記録化の手法は、今日的にみれば不十分であったことは否めない。とりわけ遺跡の層序と遺構・遺物の関係に対する認識が欠けていたことは、その後のインダス文明研究に少なからず影響を及ぼすことになった。逆に広い面積に及ぶ遺構の平面的検出を可能にしたのも、Marshall がとった方法論ゆえのことであり、いまなおインダス文明の都市計画の理解はモヘンジョダロ遺跡に負っているのも事実である。

初期の調査に欠落していた遺跡の層位的発掘を導入したのは1940年に考古局長官に就任した R.E.M. Wheeler である。すでにイギリスで層位的な発掘方法を確立していた Wheeler の登場は、遺跡の調査方法を一新させることになり、新たな情報が研究の俎上に上げられることになった。その実践が歴史時代の遺跡であるアヒッチャトラ遺跡 (Ghosh and Panigrahi 1946) とタクシラー遺跡 (Ghosh 1948)、そしてインダス文明期の遺跡であるハラッパー遺跡 (Wheeler 1947) とモヘンジョダロ遺跡の発掘調査であった。残念ながらモヘンジョダロ遺跡の調査成果は概報を除いて公刊されることがなかったが、ハラッパー遺跡における AB マウンド周壁の発掘調査はよく知られるところである (図2)。その結果として、文明期の周壁の下位に先行する時期の文化層の存在が確認されたことは重要である。層位的発掘と出土資料の様式的分析 (厳密な意味での型式学的研究とは異なるが) を通した遺跡編年の設定という方法の導入は、南アジア考古学における Wheeler の最大の業績であり、その後のインド・パキスタン現地の研究者に引き継がれることとなった。

1947年のインド・パキスタン分離独立後は、両国の研究者の相互交流が難しくなるなど、

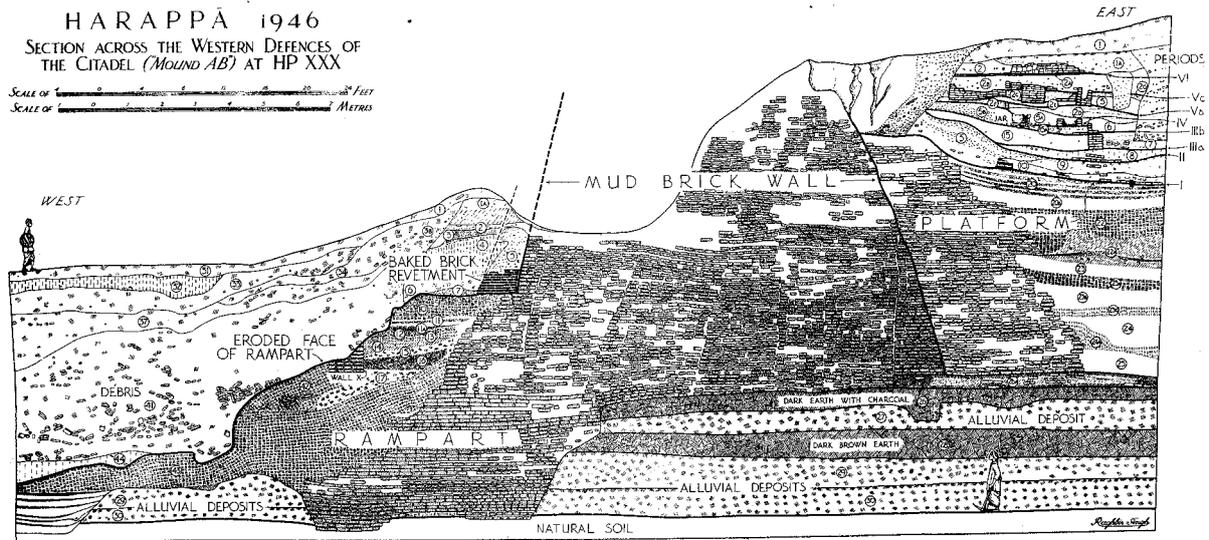


図2 Wheelerが作成したハラッパー遺跡マウンドABの土層断面図
(Wheeler 1947より)

研究に多くの弊害をもたらしたが、現地研究者の活動によって研究に新たな地平が開かれたことは事実である。また、モヘンジョダロ遺跡とハラッパー遺跡というインダス文明を代表する2つの遺跡がともにパキスタン領内に帰属することになったため、インド側ではそれらの遺跡に匹敵するインダス遺跡の発見に心血が注がれることとなったのも分離独立後の研究動向の側面である。

発掘調査の分野においては、B.B. Lalによるハスティナープラ遺跡の層位的発掘によってポスト文明期から歴史時代にかけての文化編年研究の端緒が開かれ (Lal 1954)、またロータル遺跡 (Rao 1979 ほか) やカーリーバンガン遺跡 (Thapar 1975 ほか) の調査によってインド領内にも規模は小さいながらもインダス文明期の都市が存在することが確認されることとなった。同時にパキスタン側でのコート・ディジー遺跡の調査 (Khan 1965) と合わせて、先文明期の文化の存在が明らかにされるにいたり、インダス文明の成立過程に対する研究の深化がもたらされた (Mughal 1970)。

一方、現在もなお研究方法の一翼を担う遺跡分布調査が精力的に行われたことも独立後の研究動向を特色づけており、インダス文明の版図を著しく拡大させたばかりにとどまらず、各地にさまざまな遺跡が存在し多様な地域性があることも明らかにされてきた。

さらにカーリーバンガン遺跡やロータル遺跡の調査を通して、遺跡の平面発掘による都市・集落の空間的把握も試みられるようになり、インダス遺跡の解明が進められてきたのが今日につながる研究動向といえるだろう。

その一方で、発掘調査と記録化の方法に問題点が生じているのも事実である。かつては小規模発掘と層位的出土資料による遺跡編年の確立が主たる課題であったが、近年の平面発掘への志向性の高揚に伴い、従来の発掘方法と記録では十分な対応ができなくなりつつある。遺跡の

測量図とトレンチの土層断面図、特徴的な遺物の実測図・写真が伝統的な記録方法を構成していたが、平面的な発掘は複雑に重複する遺構に対する理解と把握を要請し、その上での各種図面の作成という記録方法の刷新を求めることとなった。

伝統的に南アジアの発掘調査では調査を指揮する考古学者と、製図技師、写真技師が明確に区別され、分業システムのもとで調査が実施されてきたが、平面発掘の推進に伴って、従来の訓練を受けた技師では対応できなくなってしまう。結果としてきわめて簡便な平面図の作成が行われることとなり、考古学者による細かな観察が図という記録に反映されなくなっているのが現実である。逆に考古学者には図面を作成する訓練と実践経験がないため、図による記録方法改善を難しくしている。

また平面発掘では、小規模なトレンチによる発掘とは異なり、空間上に累積する複雑な人類の生活行為を構造的に把握する必要があるが、従来の小規模な層位的発掘の観点と方法が採用されたがゆえに、複雑な遺構と遺物の関係が無視される結果を生じさせている。論理的には遺構と遺物と層序は相互に複雑に絡み合っており、その関係のパターンは決して一様ではないのだが、南アジアにおける発掘調査の報告書では、インダス遺跡に限らず、三者の関係を分断したかたちで個別に報告がなされるのが一般的である。さらにかつての小規模発掘による遺跡の文化編年の設定方法が継続して採用されており、出土遺物は層位ごとあるいは遺構との関係ごとに報告されるのではなく、複数の層位を包括した文化時期ごとに報告されるのが慣例となっている。結果として、遺構・遺物・層序の有機的関連性は棄却され、遺跡の構造的な理解を妨げることになっている。

この点は遺跡の今日的な理解とインダス考古学研究において等閑視することのできない弊害であり、いかに改善していくかが課題である。例えば、数百年に及んで累積的に形成された数 m に及ぶ文化層序を一括りに報告してしまえば、文明社会の形成・衰退という刻々と変化していく人類の生活様式と遺跡の様相を曖昧にしてしまうであろう。遺跡という一定の期間に及んでさまざまな生活行為が営まれた空間の複雑さを発掘という方法によって解きほぐし、再び総合的に構築するためには調査方法と記録化の刷新が求められる。

4 発掘調査報告書の現状と課題

上にこれまで 147 遺跡で発掘調査が実施されてきたことを述べたが、このうち詳細な報告書が刊行されているのは 38 遺跡にすぎない。ここでいう詳細というのは発掘調査を実施した研究者が観察・記録し得た情報が網羅的に組み込まれたもので、単行書籍というかたちをとらずとも学術雑誌に掲載されたものも含んでいる。すでに発掘調査ののち数十年が経過した事例も

あり、報告書の刊行が見込めない例があることも事実である。

この背景には報告書に必要な各種記録の作成に労力と時間がかかるという実際的な要因があることは筆者の経験でも自明のことであるが、先に述べたように分業システムが確立した南アジアでは遺構・遺物の文章による記載と図面、写真を揃えるのがさらに困難になっている状況がある。学術雑誌に掲載される概報であれば、正式報告ほどの記録の提示が必要でないこともあって多くの公表例があるのに対し、正式報告書が少ないのにはこうした現実的理由があることは否めない。

こうした状況が南アジアの考古学の進展を妨げているのは事実であり、さらには一般的に報告書刊行後に可能となる第三者による出土資料の再分析や客観的評価を難しくしている。当然のことながら、インダス文明の総合的理解には、遺跡を最小の空間単位として広狭さまざまなレベルでの地域空間レベルでの資料の分析、さらにはその上で把握された地域的物質文化とそれぞれの地域文化間の関係の復元という多角的・階層的な研究が不可欠である。そのためには遺跡で取得される諸々の資料の記録化とその共有が必要となるが、概報のレベルではデータの共有は不可能である。多くの障壁が伴うことは事実であるが、この点を改善しなければ、今後の研究の進展は望むべくもないであろう。

次に報告書の構成からどういった資料が記録化の対象となり、研究の素材となってきたか概観することにしよう。一般的に南アジア考古学における発掘調査報告書は、①遺跡の立地と周辺環境、②遺跡発見の経緯、③発掘区の設定と基本層序、④遺構の記載、⑤人工遺物の記載、⑥発掘調査成果の評価から構成されている。これに⑦自然遺物の記載と⑧遺構・遺物に対する自然化学分析が加わる場合もある。南アジアの考古学は伝統的にヨーロッパ、特にイギリスの考古学の影響を色濃く受けてきたことから、とりわけ独立後の時期においても自然遺物に対する配慮がなされてきたという特色がある。動物遺存体と植物遺存体の報告がその主であり、今日でも、この種の分析を専門とする研究者の数は限られているものの、動・植物種の同定分析は一般的となっている。

課題は先に述べたようにこれら各種のデータの関連性に対する配慮が稀薄な点であり、遺跡の総合的理解を妨げる結果となっている。これも専門性を志向する教育・研究システムと確立した分業システムがもたらす負の側面であろうが、何らかのかたちで改善されていく必要がある。学際的調査が一般化している考古学の現状で、インドもまたその例外ではないが、だからこそ個別の資料の詳細な記録化と資料の種類を横断した遺跡の全体像を描く統合力が求められるであろう。発掘調査報告書はそうした基本データを提示する場であり、より上位の時間・空間レベルの研究の出発点となるべきである。

5 個別研究の現状と課題

次にインダス遺跡で出土するさまざまな遺構・遺物に関する個別研究の現状と課題についてまとめておきたい。資料それぞれの研究史について振り返るのは筆者の手に余るところであるので、数多くの研究に共通してみられる研究動向の傾向について概観することとしたい。このことは、発掘調査の方法と報告書の構成とも深く関わってくることになる問題である。

すでに、パキスタンでは欧米の研究者を中心に、インドでは現地研究者を中心に発掘調査が行われ、研究が進められていることを述べたが、両者の間には研究動向に大きな違いがある。このことは調査・研究方法が研究者の出身国もしくは出身地域における考古学の教育環境や研究動向に大きく影響を受けていることはいうまでもなく、パキスタンで活動してきた欧米の研究者は遺跡から得られた種々のデータに対する個別分析・研究を精力的に実施してきた。遺構や各種の遺物に対する個別研究が志向され、その上で遺跡の全体的理解が構築される。このことはすでに自国で、あるいは他地域の遺跡で考古学の教育・訓練を受けており、専門家としての立場で南アジアの遺跡の調査に参加する例が多いことから当然の結果といえるだろう。南アジア以外の周辺地域のデータとの比較研究が得意なのも外国人研究者の利点で、イタリア調査隊を例に挙げると、同一の研究者が南アジア以外に中央アジアや西アジアでの発掘調査に参加し、研究を進めているケースも珍しくない。結果的に欧米の研究者の場合、南アジアに限定した研究目的よりも広域を見渡した研究視点に立つ可能性が高くなる。

また外国人研究者には、南アジアの歴史の一部としてインダス文明を研究するというよりも、インダス文明を一つの素材として位置づける傾向があることも確かである。いわゆる人類学的視点に立った考古学研究であり、西南アジア世界の一部としてのインダス文明研究の相対化が志向される。

一方、インド・パキスタンの現地研究者は自国の歴史を研究するという立場と、大学で考古学教育を受け始めたときに指導教官の学問的関心に応じて遺跡の調査に訓練を受けるために参加するという立場から、目の前にある遺跡や遺物から研究活動を開始することになる。また現地の研究者の利点として、いまなお村落地帯を中心に残る伝統的な技術や知恵、あるいは生活様式に直接触れることが外国人研究者に比して容易である。民族考古学研究が現地の研究者の多くに受け入れられているのは、こうした背景があるといつてよいだろう。

逆に、インダス文明を研究していながらも隣国の遺跡を訪れることができないという政治的事情もあって、地域主義に陥ってしまう場合が多い。一つの例を挙げると、西アジアの情報に触れる機会の多い欧米研究者にはインダス文明と西アジアとの交流関係について俯瞰的な視点から論じるケースが多くみられるが、南アジアの現地研究者はインダス文明の独自性、時にはその優越性を強調する傾向が認められる。

また、現地研究者の場合、個別資料の研究が欧米研究者に比して少ないという傾向もある。現地研究者でも自分が直接参加した遺跡の発掘調査出土資料の分析は行うものの、他の遺跡の資料との比較研究や資料の相対化といった点で弱い。これは現地に出身大学や所属機関で一種の縄張り意識や派閥意識があることも関係しており、横断的な研究が難しい事情を生み出している。また、欧米の研究に直接触れる機会が限られていることから、研究目的や視点、あるいは方法論の多様化が難しいという背景もある。



図3 グジャラート州カーンバートにおける
現代の瑪瑙製装身具製作

(撮影：遠藤 仁 ©インダス・プロジェクト)

外国人研究者にしても現地研究者にしても利点と不利な点の双方を有しており、いずれが正しいということでもない。外国人研究者の中にはインダス文明に関心はあっても南アジアに対する全般的な関心や知識に乏しい者もいるであろうし、現地研究者の中に卓越した視野と独自の方法論を発達させている者もいる。そうした中で多様な研究視点と方法論の共有を軸とした共同研究の推進は、今後の南アジア考古学にとって重要な鍵となろう。

インダス考古学全般を俯瞰したとき、近年の研究動向として顕著なのは、欧米の研究者による遺物の製作技術に焦点を置いた研究の増加である。その代表はJ.M. Kenoyerによる工芸品の製作技術研究であり、海産性貝や準貴石製の装身具の製作技術復元が、遺物の観察と実験考古学、民族考古学の視点から進められてきた(図3)(Vidale *et al.* 1993; Bhan *et al.* 1994, 2002; Vidale 2000)。彼のもとで博士論文に取り組む学生にはこうした技術研究をテーマとする者が多い。こうした研究動向は遺物の個別研究に伝統のあるヨーロッパの研究者にも共有されており、フランス人研究者によるメヘルガル遺跡の資料を素材とした石器や金属器の製作技術復元研究には多くの成果がある。南アジア現地研究者の中にもこうした欧米の研究に触発されて、技術研究を進める研究者が増加しつつあるのは、学問的交流の成果である。

技術研究は技術復元にとどまるだけでなく、技術を運用した社会にも関心を寄せるものである。Kenoyerにしてもインダス文明を支えた社会組織にアプローチするために技術研究を推進しているし(Kenoyer 1997)、イタリアのM. Vidaleも技術研究がインダス文明社会の復元にとって鍵となることを強く主張している(Vidale 2000)。

また、上に少し触れたように、パキスタン、とりわけその西半部に広がるバローチスターン高原で調査活動を進めてきた研究者の間では、この地域が歴史的に南アジアとイラン高原を結ぶ毛役割を果たしてきたこともあって、インダス文明前後の時期の広域文化交流に関心をもつ者が多い(Jarrige 1985, 1993, 1994; Tosi 1979など)。独立後の南アジアでインダス文明以前の先

史文化の存在が各地で確認される中で、インダス文明の成立に対する西方からの影響を大きく見積もってきたそれまでの研究に対し、1960年代以降、南アジア内部の自律的発展を主張する見解が M.R. Mughal を中心に論じられてきたが、現在でも欧米の研究者は自律的発展のプロセスを注視する一方でイラン高原や中央アジアとの交流関係に目を配る傾向が強い。交流関係は個別の遺物の分析によって導き出されるため、欧米研究者の個別研究への傾斜を強める結果となるのは当然のことといえるだろう。

繰り返しになるが、南アジア現地研究者がもつその内部からのインダス文明に対するアプローチと、欧米の研究者が志向する広域に目を配る研究視点が、互いを否定しあうのではなく、より多様なインダス文明史観を醸成するために相互の学問交流と視点・方法論の共有の促進へと一体的に向うことが大切である。

6 インダス考古学の展望

本節では、筆者自身の関心に引き寄せながらインダス考古学の今後の課題について展望することにした。

インダス考古学の出発点

考古学を遺跡から得られる諸々の物的資料から過去の社会を復元・研究する学問と広く定義すると、その第一歩は個々の物的資料の時間的・空間的位置を明確にし、特定の種類の資料群の時間的・空間的広がりを明らかにすることである。さらにそれらの資料がどのように変化をみせるのか把握することにより、資料の背景にある諸々の歴史事象にアプローチすることが可能となる。

あらゆる分析の出発点となるのが遺跡であるが、遺跡は遺構と遺物からなる人類の生活痕跡の総体によって構成される。いかに遺跡の時間的・空間的位置を正しく把握し、上位の分析へとつなげていくかが重要であることはいままでもない。逆にいえば、遺跡の把握がなおざりであれば、上位レベルの分析や解釈は不可能となる。実際にはさまざまな制約があるものの、原理的には遺跡の分析を出発点として考古学は存在するといえるだろう。

先に述べたように、南アジアにおける発掘調査は調査方法・記録方法などさまざまな点で克服すべき課題が存在している。現在利用可能なデータにはさまざまな制約があり、必ずしも理想通りにはいかないのが現実であるが、利用可能なデータを集成・吟味し、調査・記録方法、さらには分析・解釈の方法を改善していくことも必要であろう。

インダス文明研究は、広大な地域に広がる数多くの遺跡の一部の調査によって進められてき

た。調査された遺跡の間に数百 km に及ぶ隔たりがある場合もあり、文明社会が展開した空間的広がりを面的に研究することは不可能である。散在する調査遺跡から得られた断片的な情報をつなげあわせながら、不断に文明社会の全体像を更新していくほかないであろう。

インダス文明社会の多様性と先文明期の諸文化

近年、発掘調査遺跡と分布調査で確認された遺跡のデータを組み合わせることによって、インダス文明社会が決して均質的なものではないことが指摘されている。その代表が G.L. Possehl によって提唱されたソーラト・ハラッパー文化であり (Possehl and Herman 1990)、文化領域論である (Possehl 1999)。ロージディー遺跡を代表とするグジャラート地方サウラーシュトラ半島の遺跡の調査を通して、Possehl はモヘンジョダロ遺跡が位置するシンド地方とは異なる文化が文明期に存在したことを指摘し、それに自然環境、生業の差異を組み合わせることによって、文明期の地域社会・文化の存在を提唱したのである。文化領域論はその延長線上にあるが、文明域内でも最も調査件数が多い地域の一つであるグジャラート地方とは遺跡の調査密度が異なる他の地域において、ソーラト・ハラッパー文化のような一定の空間的広がりを把握することは現状では不可能であるが、文明社会内部の多様性とそれぞれの地域の文化伝統の存在の可能性を示したことは重要である。

こうした文明域内における多様性は Possehl 以前にも論じられたことがある。その一つがパンジャブ東部におけるバーラー文化で、Y.D. Sharma によって先文明期からポスト文明期へと存続する地域文化として評価されていた (Sharma 1982)。こうした文化の多様性とインダス文明社会との関係はインダス考古学研究において必ずしも十分に消化されているとはいいがたいが、地域文化と広域展開をみせるインダス文明社会との関係はより深く研究されるべきテーマであろう。

インダス文明社会の多様性は、すなわち文明期以前の地域文化伝統の存在に帰するものである。先文明期には、のちにインダス文明社会が展開することになる広大な空間の各地に地域文化が存在していた。考古学でいうところの「文化」とは私たちの手元に残される物質資料に基づいたものであり、人文科学一般でいうところの「文化」とはその性格の把握において著しいギャップが存在している。これは考古学という学問のもつ限界であるが、ある特定の物質資料が一定の時間・空間範囲にまとまりをもって存在することが確認される場合、その背景にはその物質資料、特に人工遺物の場合、ある生活もしくは社会的営為によって要請される特定の機能を果たすために、特定の素材を特定の技術で特定の形につくりかえるという一連の連鎖的行為が時間・空間軸上に存在したことになる。それはすなわちある地域にある時間幅をもって生活した人々のそうした連鎖的行為を必要とする意識の存在を意味するのであり、あくまで物質資料に基づいて把握される考古学的「文化」であってもその背景には物質的領域を超越した人

類社会の諸側面が投影されていると理解すべきであろう。それが制約はあっても考古学的「文化」が人類社会の研究においてもつ意義を保証するのである。

一方、文化とはある特定のコンテキスト、それはすなわち一定の地域空間に生活する人々の生活様式を決定する人為的規定に基づくものであり、それはとりもなおさず時間的・空間的に限定される人間集団すなわち社会集団に帰せられることになる。この観点からすると、社会と文化は密接に結合したものであり、文化を語る際にはその背景にある社会を考慮せざる得ないし、逆に社会を考えるとときにその文化を理解する必要性が生まれてくるのである。

先史社会においては、先に述べたように「文化」として把握される存在にも限定性が生じるため、物質資料からだけではわからないことが多い。また、先史社会といってもその社会の具体的組織・構造の全体を物質資料から復元することは不可能である。結果的に考古学、特に先史社会に関しては、社会にしても文化にしても、私たちの理解に偏りが生じるのはやむを得ないことである。それを補完すべく広く人文科学の成果を考古学的「文化」もしくは「社会」の欠落を補うために援用するのが、考古学の方法論の一部を構成しているのであるが、広く人類史を振り返ってみても、物質的側面が社会・文化の不可欠な要素として存在してきたことは事実であり、いかに物質資料から出発して過去の人類社会に対する私たちの理解を深めていくかという視座が求められることになる。

ここでこうした前置きを記したのは、インダス文明期以前の様相をいかに理解できるのかということとも関わってくるためである。すでに先文明期の多様性という表現を用いたが、多様性が存在したかどうかという理解は、いかに遺跡から得られる資料をもとに地域文化の存在を把握するかということに関わっている。それはすなわち私たちが物質資料をどのように認識・評価するかということであり、それは研究者の拠って立つ人類社会に対する視座に左右されることになる。

世界中を広く見渡しても、考古学の分野でいう文化を定義する場合、土器が基準として用いられることが多い。文化の名称に土器の名称を当てている事例が多いことからわかる。南アジアでも例えばナール式土器と定義された土器の時間的・空間的広がりやの把握のもとにナール文化が設定されているし、同様の手法でポスト文明期から初期歴史時代には彩文灰色土器文化や北方黒色磨研土器文化という名称が与えられている。これは土器が存在する時代であれば、ほぼすべての遺跡で土器が出土することからその空間的広がりを把握しやすいという理由によるものである。と同時に、土器に時間的・空間的变化が鋭敏に反映される傾向が認められるという土器が人類社会の中でもつ特質もその理由の一つに数えられよう。

ただし、土器で文化を実体化することが全面的に肯定される訳でもない。先に述べたように考古学が扱う物質資料にはさまざまな制約があり、物質資料の種類に応じてそこに表出する社会・文化的意味も異なっている。土器は一義的には生活行為の中で用いられる容器であって、

それ以上でも以下でもない。必然的に土器によって過去の社会・文化を定義することができるのかという本質的疑問が生じるのも当然である。逆に遺跡から出土する遺物の99%が土器である場合も一般的であって、土器以外にその遺跡を評価する手段がないこともある。

考古学では遺跡から出土する諸々の物質資料をいかに分類、系統化し、雑然と遺跡に残される資料の中に過去の社会を復元する手掛りを見いだしていくかということが方法論的前提として存在している。その中で量的に最も多く出土する資料がその遺跡の時間・空間的位置の把握に有効であることは事実であり、結果としてかつて存在したであろう文化のごく一部でしかない資料が文化を把握する基準に用いられることになるのである。

ただし、ここで改めて確認しなければならないのは、一部の特徴的な資料、例えば土器によって文化を定義するというのは、私たちが過去の社会を復元するという学問的目的を達成するための一手順であって、土器の名称を冠した文化がかつて実在した訳ではないことである。あくまでも考古学という学問において系統的思考を可能にするための手段なのである。

こうした偏りを是正していくためには、学問的手続きの一過程として土器によって文化の存在を推定したとしても、その後に土器以外の物質資料によって土器文化が有効であるのかどうか検証していく不断の学問的営為が求められることはいうまでもない。それは私たちの過去の人類社会・文化をよりよく理解していくために不可欠であり、それが考古学の方法論であるということになる。

例を挙げると、先文明期終末の初期ハラッパー文化期のパンジャブ平原にはその東西に大別して2つの土器文化が存在したことが明らかになっているが（西部のコート・ディジー文化と東部のソーティ＝シースワール文化）（図5）、同時期の凍石製印章の分布をみると（図7）、共通した特徴をもつ印章がパンジャブ平原全体に分布しているという状況がある。すなわち、土器と印章で分布のあり方が異なるのであり、土器で設定された文化と印章の分布が一致しないのである。これは土器と印章がもっていた社会・文化的意味が異なるであろうことから考えれば当然のことである。また、ポスト文明期から初期歴史時代にはガンガー平原の東西で彩文灰色土器と北方黒色磨研土器が地域を違えて分布しているが、土器以外では両地域に共通する人工遺物が出土する。

こうした状況をいかに理解するかということも考古学者の視座にかかってくることになるが、土器とそれ以外の人工遺物の間に異なる社会・文化的意味が与えられていた結果であろうことはきわめて蓋然性の高いところであり、そこから当時の人類社会のもつ組織・構造の物質的側面により深くアプローチすることが可能になる。

南アジアでは、その空間的範囲の広さに比して発掘遺跡数が極端に少ないこともあって、どこでも出土する土器が文化の把握に用いられるのは、研究の現状では仕方のないところであるが、今後の研究では諸々の物質資料（人工遺物・自然遺物の双方を含めて）の系統性の確立

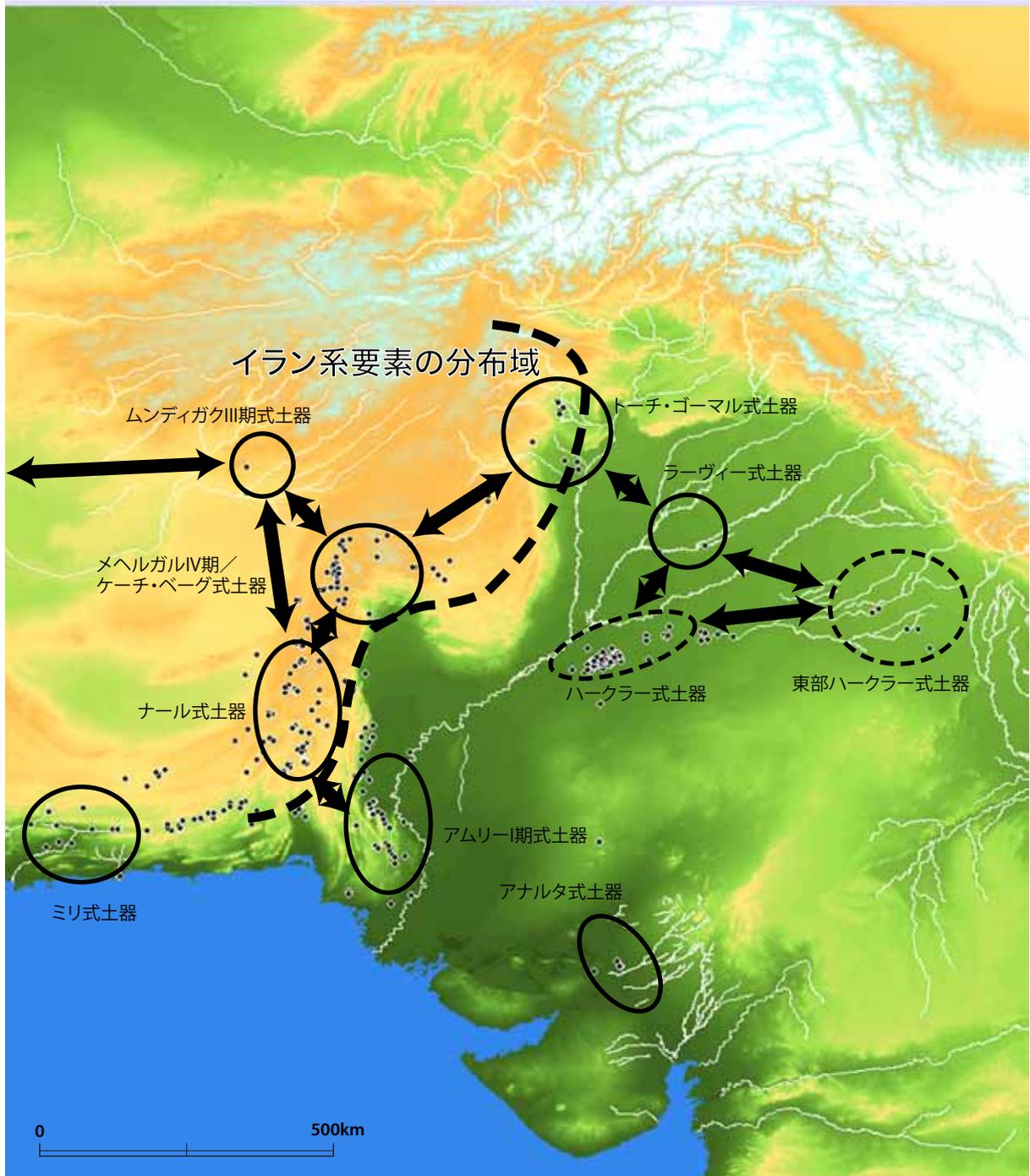


図4 前4千年紀後半における地域文化と地域間交流の様相

とその分布、さらには分布のあり方の比較研究によってより具体的に当時の社会・文化の様相へと私たちの理解を近づけていくことが求められるであろう。

前置きが長くなってしまったが、ここで先文明期の多様性の議論へと戻ることになろう。土器が先文明期の社会・文化の把握の主たる手段となっているのは、すでに述べてきたところであり、以下に述べる先文明期の様相もそうした制約を前提として理解されたい。

先文明期の様相を俯瞰すると、バローチスターン高原以西とインダス平原以東で出土する土器に大きな違いが認められる。バローチスターン高原では多彩な彩文が描かれた土器が顕著で

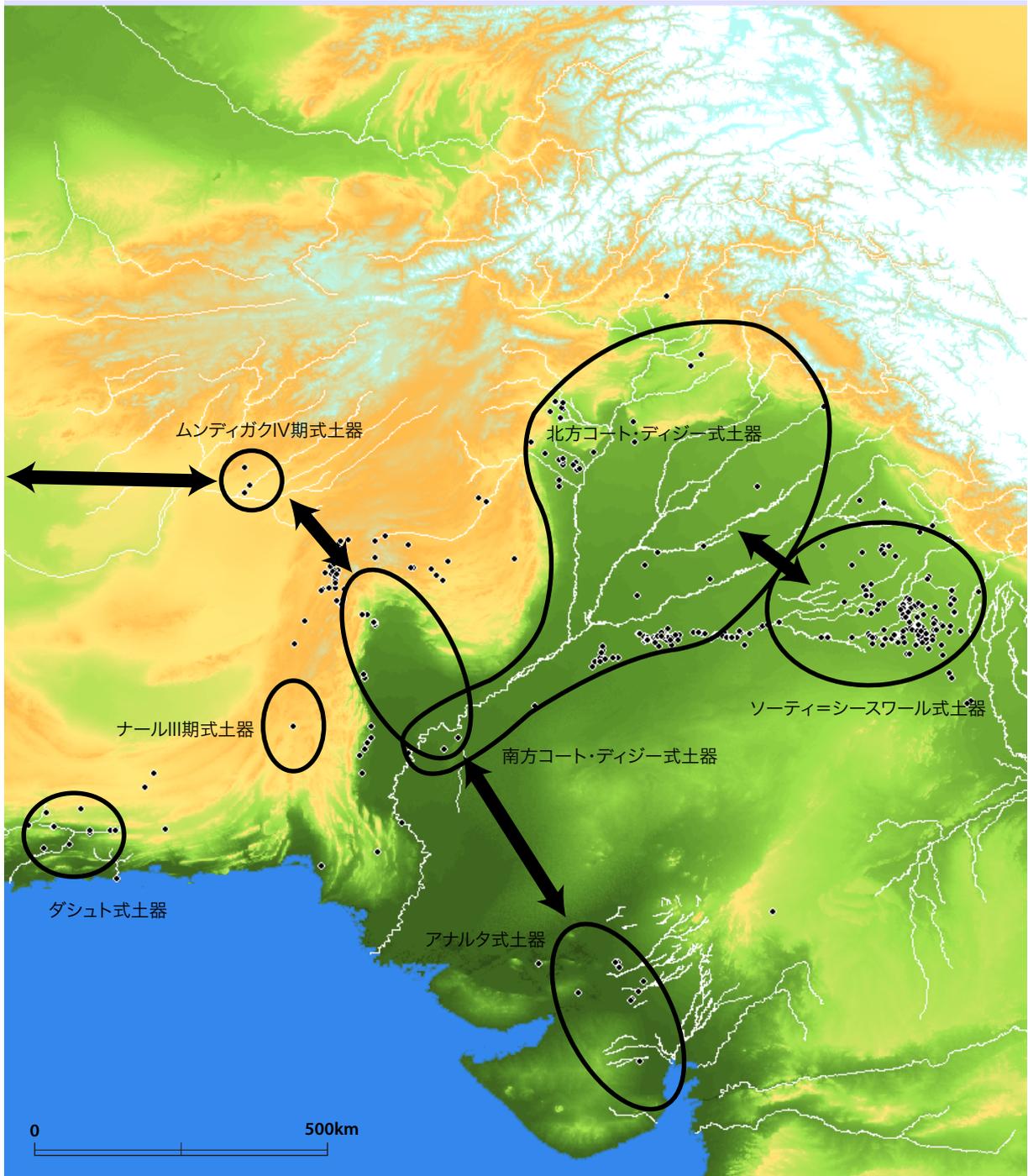


図5 前3千年紀前葉における地域文化と地域間交流の様相

あり、それはさらに西のイラン高原にも共通する土器の様式的特徴である。もちろん彩文が施されない土器も彩文土器に組み合わさって全体の地域的土器様式が存在しているのだが、特徴的な彩文を中心にこれまでの研究が展開してきていることから、ひとまずここでは彩文土器に注目しておこう。彩文土器に着目すれば、前4千年紀後半にはバローチスターン高原南部にはナール式土器が、中央部にはケーチ・ベグ式土器が、北東部にはトーチ=ゴーマル式土器が存在している（図4）。いずれも器種構成、器形、彩文のヴァリエーションで明確な違いがあるので、それぞれ別系統の彩文土器として理解できるが、その一方で共通する彩文要素も存在

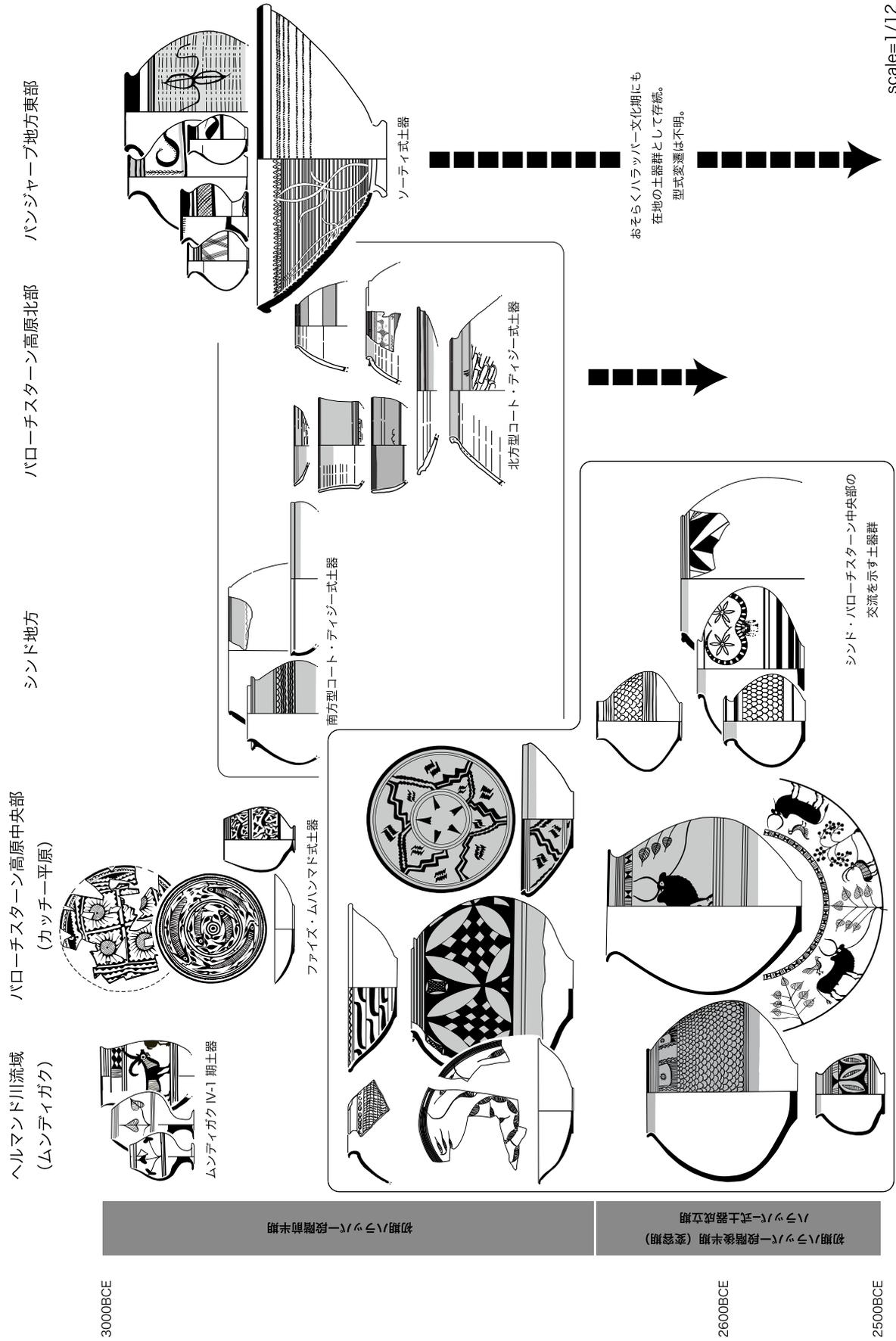


図6 前3千年紀前葉における地域土器様式の変遷 (上杉・小茄子川 2008 より)

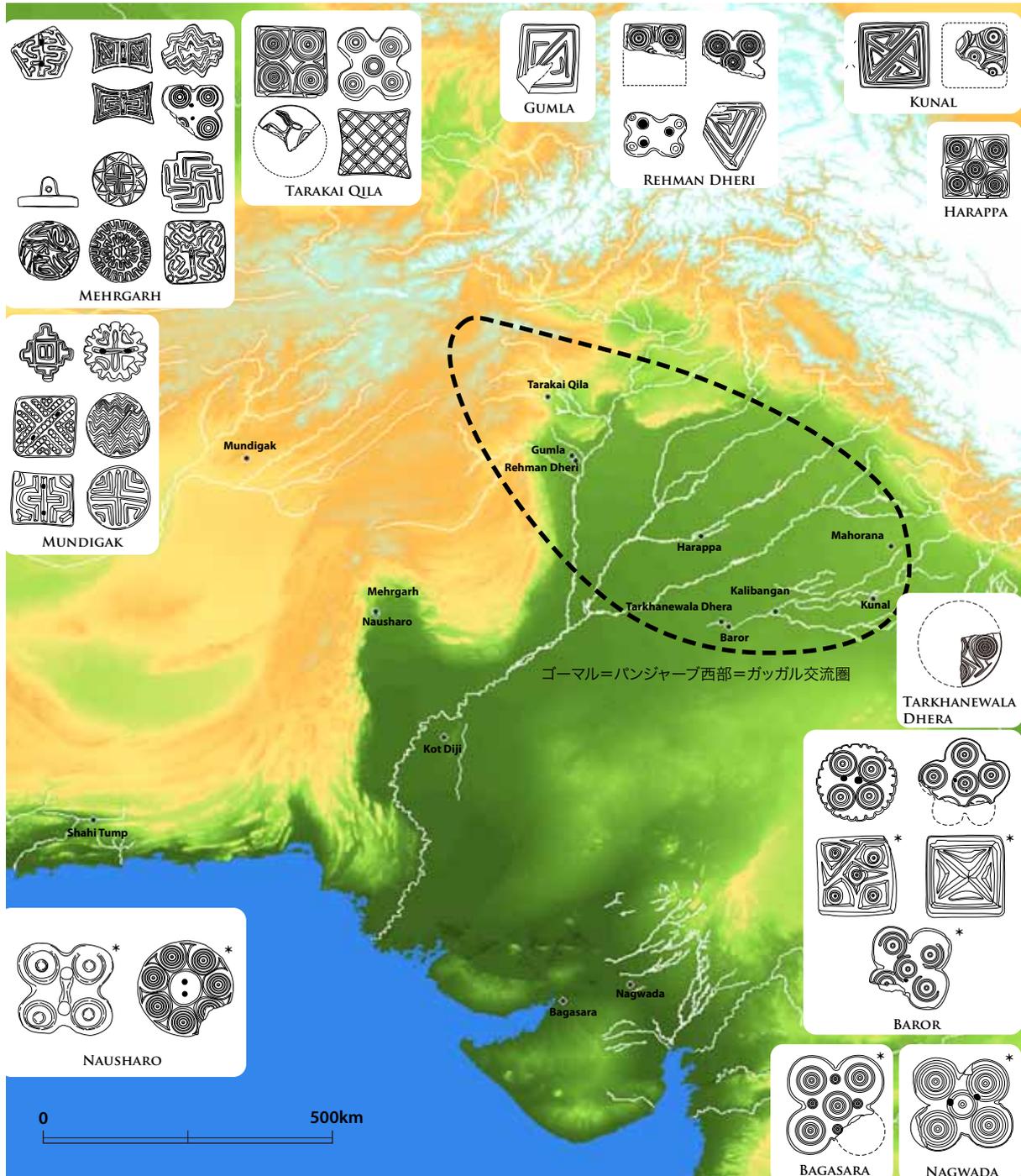


図7 前3千年紀前葉における凍石製同心円文印章の分布
 (*をつけたものは文明期出土)

しており、さらにはイラン高原南東部にも関連をみせている。このことは、バローチスターン高原各地に地域的彩文土器様式が成立した一方で、それぞれの間には接触・交渉があり、その背景にイラン高原とバローチスターン高原の関係が介在していたことを窺わせている。

一方、インダス平原部ではその西部でバローチスターン高原の地域土器様式との接触を垣間見せる要素が存在するものの、無文もしくは単純な帯状文を描く彩文土器、あるいは櫛状工具を用いた平行沈線文など、バローチスターン高原の土器とは異なる特徴をもった土器群が存在

する。ハークラー式土器、ラーヴィー式土器などがこの時期の平原部の土器を代表するが（図4）、調査が限られていることもあって、前4千年紀後半の平原部の土器様式を空間的に把握するのはいまなお困難であるのが実際である。それでもバローチスタン高原の地域土器様式群とは異なる土器様式が存在していたことは確実である。また、グジャラート地方にはその北部を中心としてアナルタ式土器と呼ばれる土器様式が存在する。平行線・格子充填文様帯を特徴とする彩文土器が存在し、上記のハークラー式土器やラーヴィー式土器、あるいはバローチスタン高原の土器様式とは違いが顕著である。今後の調査・研究が期待される土器様式ということができるだろう。

前3千年紀前葉（前3000～前2600年頃）になると、バローチスタン高原ではダンプ・サダート式土器やファイズ・ムハンマド式土器を特徴とするメヘルガル遺跡VI・VII期併行期の土器様式がその中央部に広く分布し、南部ではナール遺跡III期、ミリ・カラート遺跡III期に併行する彩文土器群が展開する（図5）。前4千年紀とは大きく異なる彩文土器様式が展開することから、イラン高原との関係を軸の一端としつつ、彩文土器様式群を大きく変化させる歴史的背景が生じたことを推定させる。

インダス平原部では幅広黒色帯を施した壺を特徴とするコート・ディジー式土器とソーティ＝シースワール式土器が分布する（図5）。前者はパンジャブ地方西部からシンド地方にかけてのインダス川流域、後者はパンジャブ地方東部のガッガル川流域に分布するが、両者は黒色帯壺において類似性をみせるものの大きく異なっており、接触・交渉をもちつつも独自の地域的土器様式を生み出す地域社会・文化の存在を窺わせている。その一方で、先に述べたように凍石製印章をみると同心円文を複数刻んだ印章が西のゴーマル地方からパンジャブ地方西部、さらにはパンジャブ地方東部にまで分布しており、地域間交流が活発化していたことを示している（図7）。印章は土器とは違って地域間交流に直接関与する器物と推定されることから、より本格的な地域間交流のネットワークあるいは地域社会間の結びつきが醸成されていたと考えられるであろう。

一方、シンド地方に目を配ると、初期ハラッパー文化期終末（前2700～前2600年頃）にバローチスタン高原中央部との関係を示す資料が確認されている（図6）。本来コート・ディジー式土器の組成に出自する鍔付壺がバローチスタン高原中央部の伝統に含まれるカッチー平原においても生産されていたことがメヘルガル遺跡近郊のラール・シャーハ遺跡の土器生産工房址で確認されており（Pracchia 1985）、両地域間の交流を推進する動きが存在したことがわかる。さらにこの地域間交流のもとで生産されることになった鍔付壺はイラン高原南東部のシャフリ・ソフタ遺跡にまで搬出されており、シンド＝バローチスタン高原中央部＝アフガニスタン南部＝イラン高原南東部というルートが一つの地域間交流の軸となっていたことを示している。

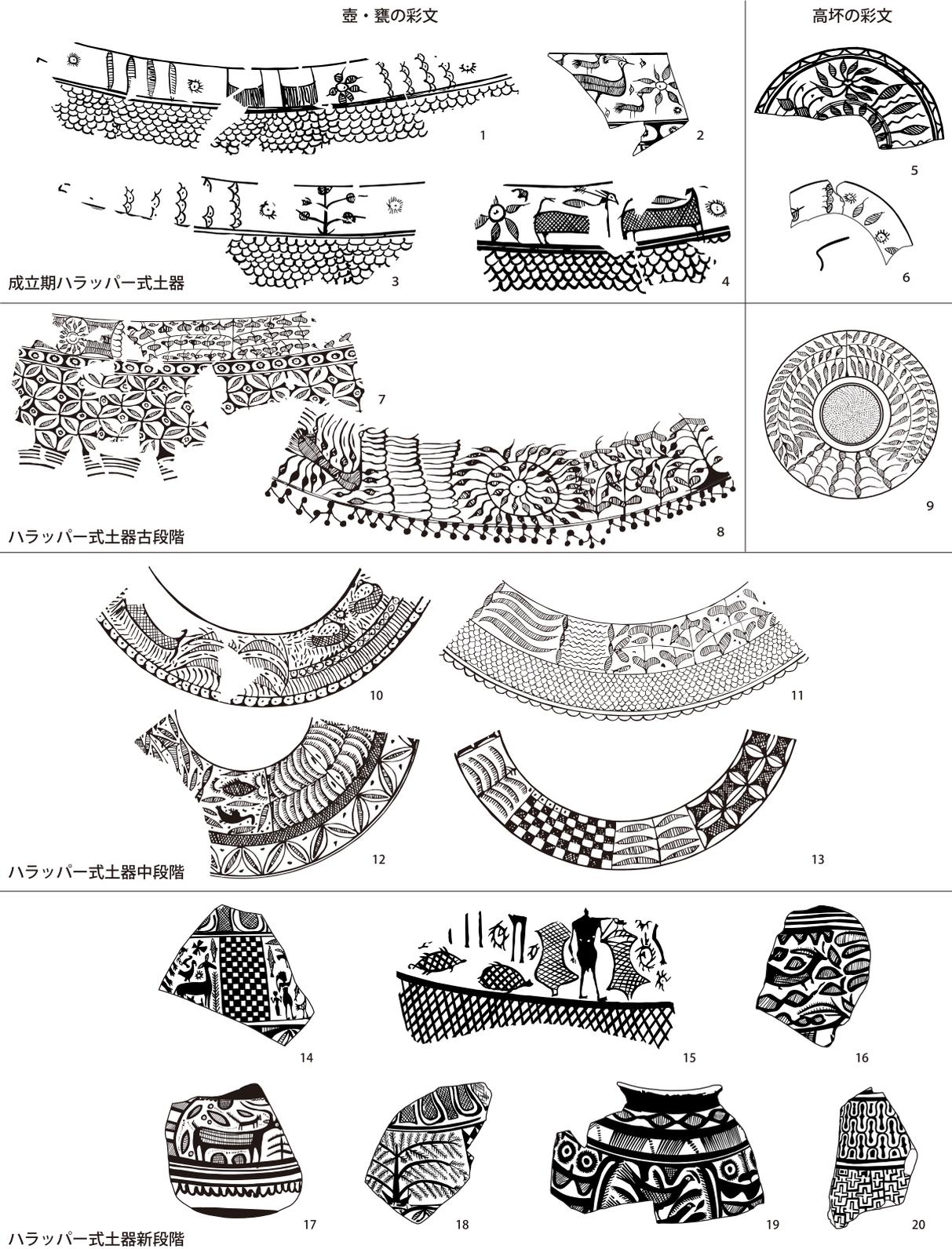


図8 ハラッパー式彩文土器の編年 (上杉・小茄子川 2008 より)

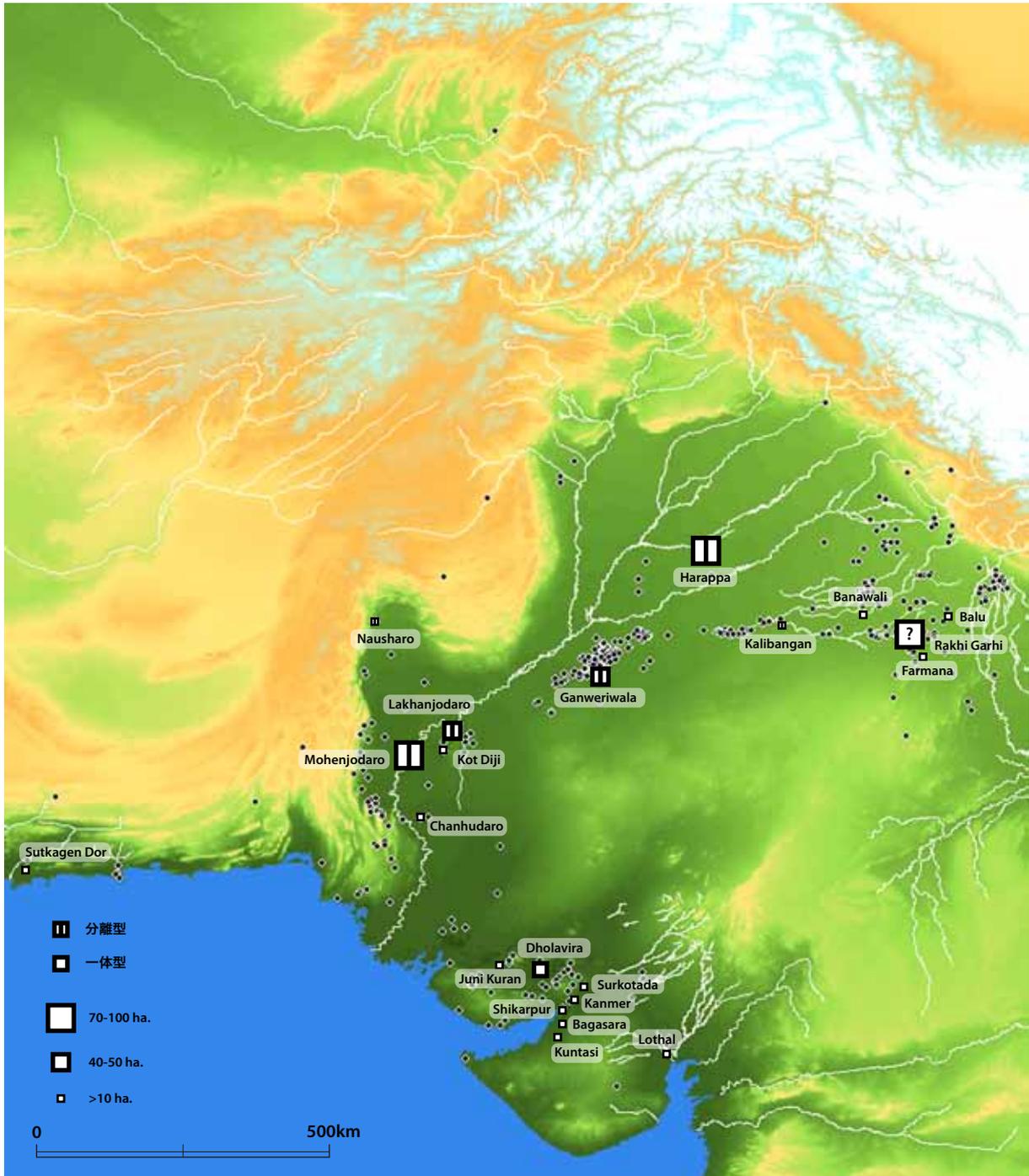


図9 インダス文明の都市および拠点集落の分布

また、グジャラート地方では前代に引き続きアナルタ式土器が分布するが、そこに非アナルタ式土器が嵌入するという状況が確認されている（Ajithprasad 2002）。モーティ・ピープリー遺跡、ナーグワダー遺跡、サントリー遺跡などの出土土器がそれで、シンド地方もしくはバローチスタン高原南部との関係が示唆される。グジャラート地方もシンド地方を核の一つとする地域間交流のネットワークに組み込まれつつあったことを示しており、おそらくは初期ハラッパー文化期終末に位置づけられるであろう。

以上のようにみてくると、少なくとも土器でみれば前4千年紀後半以降、バローチスタン

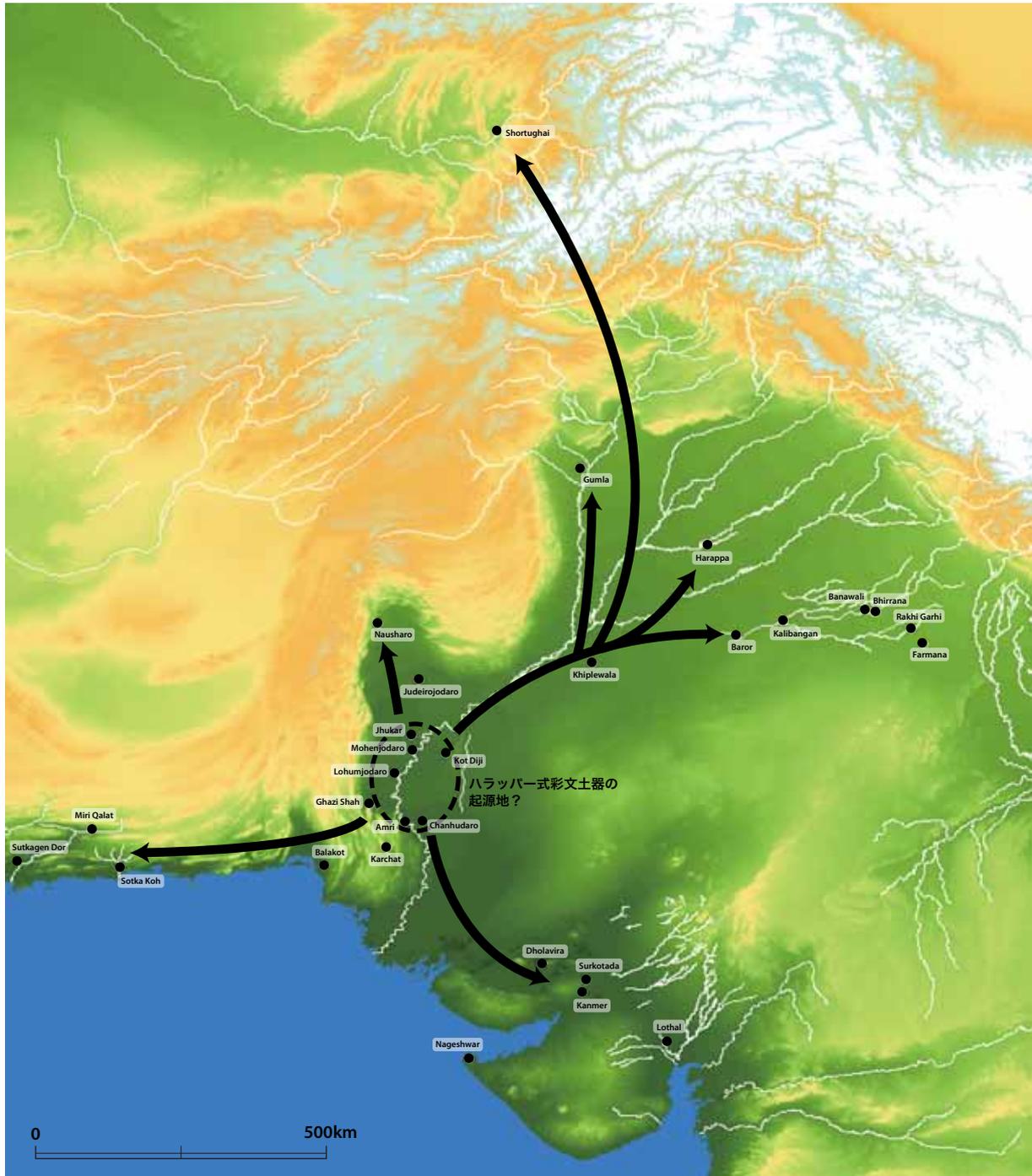


図 10 ハラッパー式彩文土器（古段階）の分布

高原からインダス平原にかけての各地で独自の土器様式が成立する一方、地域間交流も活発化し、前3千年紀前葉には地域間交流の拡大と地域統合の進展が進んだ状況を看とることができる。これは多様な地域社会・文化とそれをつなぐ地域間交流が両者連動しつつ進行していたことを示しており、文明期以前の様相を把握する上での一つの軸とすることができる。

インダス文明期の様相

文明期になると、各地で共通する器物が出土するようになる。その代表がハラッパー式土器

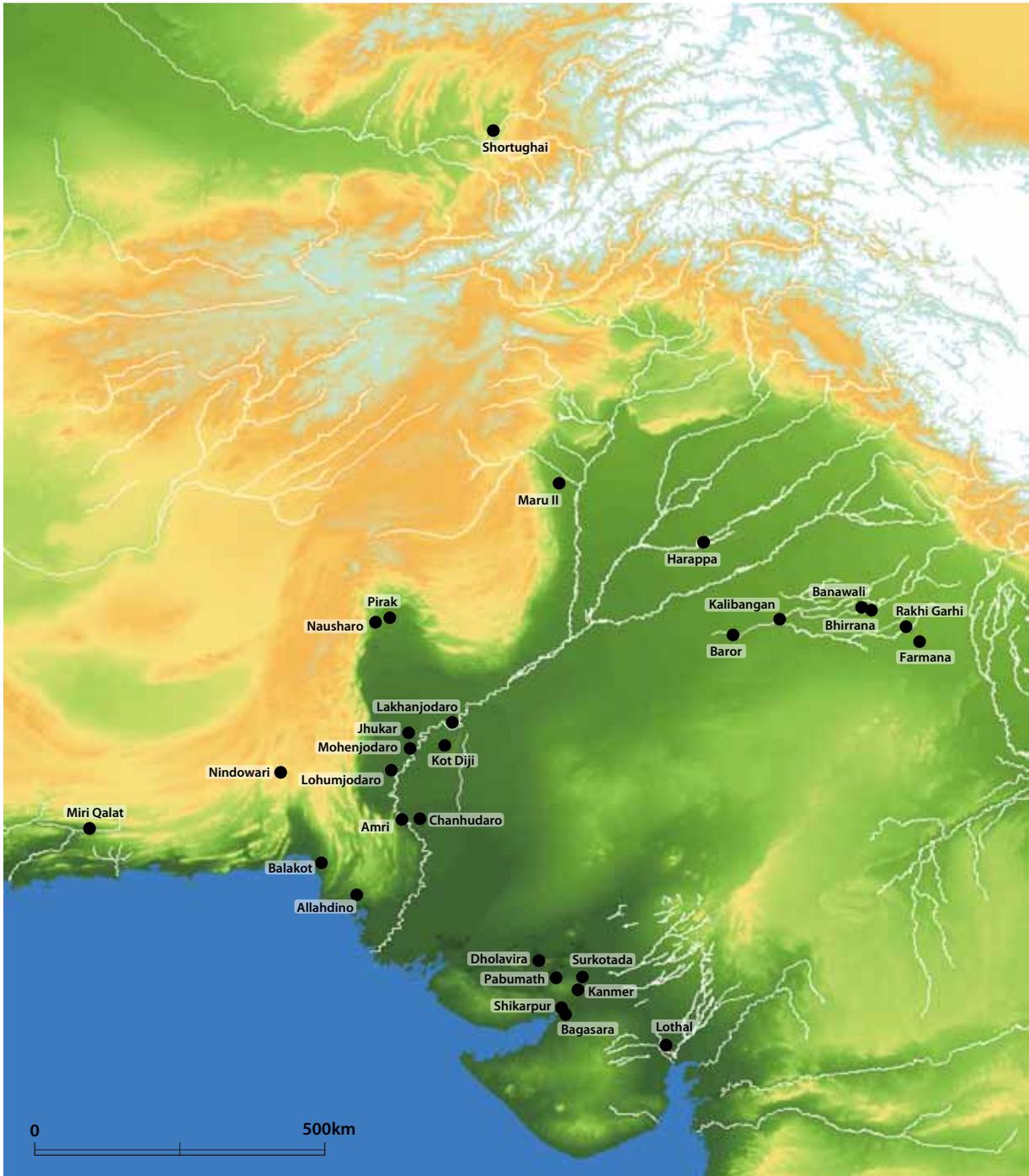


図 11 インダス式印章の分布

とインダス式印章であり、これらが出土するがゆえにインダス文明の広がった範囲を確定することができるのである（図 10・11）。

ハラッパー式土器に関しては、G. Quivron の層位的出土資料に基づいた型式学的分析（Quivron 2000）によって断片的ながらもその成立過程が明らかにされつつある（図 8）。それによれば、シンド地方にハラッパー式土器の成立の契機が求められるであろうということであるが、ハラッパー式彩文土器の中にバローチスターン高原中央部の彩文要素が改変されつつも組み込まれる状況からみれば、初期ハラッパー文化期終末の地域間交流の様相ともかねあわせて、可能性

の高いことと首肯できる。実態の解明には今後の調査・研究の進展が不可欠ではあるが、現状での資料に基づく仮説として重要である。

インダス式印章に関しては、その成立過程がほとんど不明といわざるを得ない。周知の通り、インダス式印章は定型化された一角獣を中心的意匠とする動物文とインダス文字の組み合わせという図像的特徴と、方形かつ紐を通すための鈕をもつという形態的特徴からなるが、初期ハラッパー文化期にはその祖型とみなしうる印章が確認されていないことが原因である。唯一、ハラッパー遺跡Ⅱ期出土の印章断片が方形でゾウと推定される左向きの動物を描く点で、インダス式印章との類似性をみせるものの、インダス式印章の成立過程を復元するには不十分である。

想像の域を出ないものの、インダス文明社会の成立、すなわち初期ハラッパー文化期とは異なる社会の仕組みの成立に、地域間交流あるいは地域間関係を大きく再編する政治的動きがあったとするならば、新たな地域間関係を表象したであろうインダス式印章が先行の印章に祖型をもたない可能性もある。ただし、ハラッパー式彩文土器に示されるようにシンド地方が文明成立過程において一定の役割を果たしていたのであれば、インダス式印章の成立にもシンド地方の役割を一定程度は想定することができるかもしれない。あるいはハラッパー遺跡が存在するパンジャーブ地方西部の重要性も考慮すべきであろう。いずれにしても資料の絶対的不足を認めないのが、先文明期から文明期への移行段階を示す遺跡の調査事例の少なさであり、今後の課題である。

いずれにしてもハラッパー式土器とインダス式印章が広範に分布する状況は、先文明期の地域間関係とは明確な断絶を示しており、モヘンジョダロ遺跡やハラッパー遺跡における都市の成立とも関係して、文明社会の成立過程を考える上で重要である。G. Quivron のハラッパー式彩文土器の研究によれば、古段階（ハラッパー遺跡3A期、ナウシャロー遺跡Ⅱ期）に位置づけられる彩文土器がアフガニスタン北部のショールトゥガイ遺跡、西のマクラーン地方のソトカーゲン・ドール遺跡、東のグジャラート地方のロータル遺跡で確認されており（Quivron 2000）、また筆者自身が検討の機会を得たラーキー・ガリー遺跡表面採集資料、ファルマーナー遺跡発掘調査出土資料にも古段階併行の彩文土器が存在する（Dangi 2009; Shinde *et al.* 2008）。ある特定の特徴をもった型式に属する器物の拡散にどの程度の時間幅を見積もるかという問題もあるが、文明社会の成立を一つの政治的社会変容と理解するならば、さほど離れない時間幅でハラッパー式土器が各地に拡散したと考えてよいであろう。

初期ハラッパー文化期の多様な地域社会・文化群を横断するかのごとく広がるハラッパー文化の要素は、文明社会がもつ等質性もしくは均質性を意味しているが、ハラッパー文化の拡散は先文明期の地域文化を消滅させたわけではない。カーリーバンガン遺跡、ラーキー・ガリー遺跡、ドーラーヴィーラー遺跡など、インダス文明を代表する都市遺跡は、仮にシンド地方と

パンジャーブ地方西部をハラッパー文化の核とみなせば、その縁辺地域に位置しているが、文明期になっても先行期の土器がハラッパー式土器とともに出土している。異なる土器様式の背景に異なる社会・文化集団を想定できるかどうか多くの問題があるが、少なくとも異なる特徴をもった土器が遺跡という空間の中で併行して使用されていたことは確かであり、それは都市という文明社会を結びつける上で重要な役割となった拠点においても同様であったことがわかる。都市にハラッパー文化を担う、もしくは志向する集団が、その周辺に在地の文化伝統を保持する集団が別々に暮らしていたのではなく、両者の文化伝統が混在して都市空間を創りあげていたのである。

ここから導き出されるのは、確かにハラッパー文化には広域に拡散する社会・文化的志向が存在したが、彼らのみが文明社会を構成していたのではなく、初期ハラッパー文化期にすでに広域地域間交流の中に組み込まれていた各地の社会・文化と、シンド・パンジャーブ地方西部に出自を推定されるハラッパー文化が相互に組み合わせることでインダス文明社会が成り立っていた事実で、インダス文明の意義を理解する出発点である。インド人研究者に好まれるハラッパー文明の用語をここで採用しないのは、ハラッパー文化＝インダス文明ではなく、ハラッパー文化は文明社会を担う一要素にすぎないとする筆者の理解に基づくものであり、その混同はインダス文明社会の理解に妨げになると考えるからである。ハラッパー文化と各地の文化の相互関係こそがインダス文明を生み出したのである。

インダス文明期、すなわち前 2600 ～前 1900 年頃という時間幅の中で、文明社会がどのように展開したのか、もしくは変遷したのかという問いに十分な答えを準備できないのが現状である。700 年という時間幅は決して短いものではない。その間に文明社会の成立から衰退にいたるプロセスが包括されていることを考えれば、さまざまな変転があったであろうことは想像に難くないところである。Quivron のハラッパー式土器彩文土器研究は、ハラッパー式土器の成立期にのみならず、その後の変化、さらにはハラッパー式土器の衰退へと続く一連の歴史的事象の一端を示した上でもきわめて重要である。彼はハラッパー式彩文土器を成立期、古段階、中段階、新段階に分け、彩文の変遷を見事に描き出しているが、その変遷はインダス文明社会の変遷をも垣間見せる上で注目される。筆者も Quivron の研究に触発される中で小茄子川歩と共同でハラッパー式彩文土器の変遷の背景にある歴史事象を、文明後半期にバローチスタン高原南部を中心に展開したクッリ式土器との関係を中心に考察したが（上杉・小茄子川 2008）、メソポタミア、イラン高原、ペルシャ湾岸、中央アジアとの関係からみると、文明後半期（前 2300 ～前 2000 年頃）にインダス文明社会を取り巻く国際環境は著しく変化していたと推定され、必然的に文明社会もそれに対応した変容を余儀なくされたと考えられる。

イラン高原の再編とバクトリア＝マルギアナ考古文化複合の成立、アラビア海交易の活発化、その背景にあるであろうアッカド帝国成立を契機とするメソポタミア文明の変容は西南アジア

世界を大きく変える一連の歴史事象であり、西方との関係をもったインダス文明社会もその影響の外に置かれるものではなかったであろう。私見を述べれば、イラン高原およびペルシャ湾岸と関係をもつクッリ文化の成立はインダス文明社会と西方との関係にとって大きな影響力をもつものであったと考えられ、結果としてインダス文明社会は西方とつながる交流ネットワークの中で影響力を弱めていったと想定される。これが少なくとも人類社会の側から見たときのインダス文明衰退の要因の一つと推定できる。

衰退のプロセスはその成立と同様に決して単純なものではなかったであろう。自然環境の変化も関わっている可能性はあり、複合的にインダス文明社会に影響を及ぼしたと想定すべきであるが、いかなる要因に衰退の契機があるとしても、文明社会の衰退は人類社会の変化であり、その衰退のプロセスを細かく理解しない限り、歴史事象としての文明社会の衰退を正しく評価することはできないであろう。そのプロセスを理解する一つの視座がインダス文明社会を取り巻くさまざまなレベルでのネットワークの変遷である。

文明社会とネットワーク

ここでいうネットワークとは地域間の関係である。地域間の関係を決定する要因として、生産・流通を包括する交易を中心とする経済的要因であったり、さまざまな人的・自然的資源に対するアクセスに関わる政治的要因が考えられるが、その根幹には人の移動と情報・物資の移動が位置づけられるであろう。交易活動においても日常的消費材から奢侈的稀少財までさまざまな資源の生産・流通を可能にする人の移動が不可欠である。また、資源の流通に関与して、特に稀少財への管理権を機能の一端とする政治権力もまた、人の移動を前提としている。

こうした観点に立つて、先文明期から文明期を俯瞰すると、①前7000年前後にさかのぼるとされる西アジア型栽培植物と農耕技術の伝播、②それに続く農耕集落の成立と遠距離資源の開発・利用（前7000～前4000年頃）、③一定の地域範囲を包括する地域社会・文化の成立と地域間交流の進展（前4000～前3000年頃）、④地域間交流の活発化と拠点集落の成立（前3000～前2600年頃）、そして⑤都市を拠点とする文明社会の成立（前2600年頃）という一連の流れを看とることができる（図12）。ここで示した年代はあくまでも参考として挙げたものであり、各歴史事象の展開も決して一律ではなく、多様な軸に沿って多系的に進んだものであろうと考えられるが、議論を整理する上でのこととして理解していただきたい。

この軸に沿ってみると、人の直接的移住かどうかの議論は別にして、人の移動とそれに伴う地域間の交流がさまざまな空間レベルで生じていたであろうことがわかる。西アジア型栽培植物と農耕技術の伝播にはイラン方面からの移住もしくは交流を介した情報・物資の伝播が想定され、メヘルガル遺跡I期の埋葬址におけるラピスラズリ製装身具の出土はアフガニスタン北部もしくは南部の産地との関係を物語る。その評価をどのように見積もるかは別にしても、こ

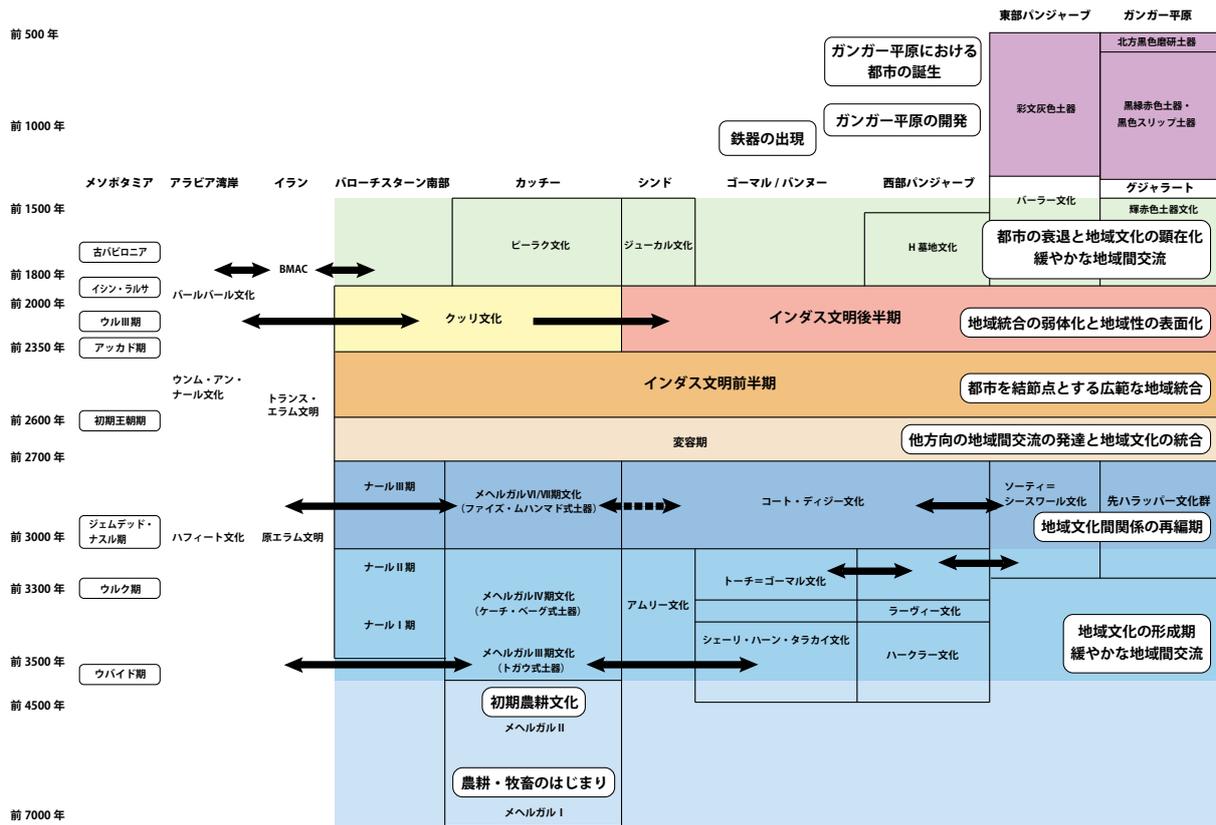


図 12 インダス地域における文化編年

の時期のバローチスターン高原における農耕集落が周辺地域と隔絶していたわけではないことを示す重要な証拠である。

地域社会・文化の成立と地域間交流の進展に関しては、依然として資料の絶対的不足が否めないが、前4千年紀後半までにバローチスターン高原の各地に一定の地域空間に広がる社会・文化が成立し、またイラン高原とつながる広域交流が存在したことは確実である。中央アジア、イラン高原南東部、そしてバローチスターン高原をつなぐ文化交流ネットワークの存在は多くの研究者によって指摘されてきたところである。物資・情報の移動は必然的に人の移動を前提としており、この時期にバローチスターン高原と西方の間で特定の器物における共通性もしくは類似性を生起させる人の移動と交流が行われていたことは確実であろう。

インダス平原部に関しては、資料が不足するものの、バローチスターン高原との交流であったり、平原部の河川沿いの交通路を介した交流が活発化し、地域社会・文化の成立が促進されたとの想定は現有資料においても可能である。

この時期のメヘルガル遺跡IV期やラフマーン・デーリ遺跡I期ではイラン系の意匠をもった印章が出土しているが、印章の存在は地域間交流の拡大とその制度化を意味するものであろう。地域間交流の拡大によって人の移動と情報・物資の流通が増大すれば、当然その流れを管理したり、あるいはより円滑化させようという動きが生じるであろう。印章はまさにそうした交流関係の制度化に関わるものであり、都市文明化するウルク文化期のメソポタミアにつなが

るイラン高原の政治・経済的ネットワークに、その末端ながらバローチスタン高原も参画するようになったとするのが私見である。

前3千年紀前葉はそうした西方との交流ネットワークがインダス平原内にも拡大するとともに、その裏返しとしての地域内部の交流関係と地域統合が増進した時期である。コート・ディジー式土器にしてもソーティ=シースワール式土器にしてもそれぞれインダス川とガッガル川を軸にする広域文化の存在を示しており、さらには同心円文印章による地域間交流の増進をもみせている。また、コート・ディジー文化が北のヒマラヤ山脈中に進出しようとしたこともサライー・コーラー遺跡やブルザホーム遺跡の出土資料に窺われるところである。シンド地方とバローチスタン高原中央部の関係も、前代にはつながっていなかった地域を統合しようとした結果である。地域社会の拡大と地域間交流の進展は決して相反する事象ではなく、むしろ一つの流れの表裏として相互に連動するものである。また、上述のコート・ディジー文化の北方進出や同心円文印章の創出、さらにはこの時期における拠点集落の成立（ハラッパー遺跡II期、ラフマーン・デーリ遺跡III期、カーリーバンガン遺跡I期など）といった諸事象は、一定程度地域社会が政治的な動きをみせるようになったことを窺わせている。

先に述べたように、初期ハラッパー文化期とインダス文明期の地域間交流・関係には一定の断絶があつて、その移行期をいかに理解するかが、文明社会の成立を考える上で鍵となる。ただし、現象面でみると、文明社会は前代の地域社会・文化と地域間関係を基盤としながらも大きく再編しており、そこに政治的な動きがあつたであろうことは想像に難くない。それがいかなる性質を帯びたものであつたのかという問題は今後の研究課題である。

以上、先文明期から文明期にかけての地域間交流の様相、さらには文明社会の成立過程との関係を概観してきたが、今後の研究を見据えた上で少し別の角度から議論を整理しておきたい。

地域間交流あるいは交流ネットワークといってもその内実は多様である。考古学の研究に大きく依存するインダス文明研究においては、考古学がもつ諸々の条件に理解が制約されるのは仕方のないところであり、結果として交流の実態に対する具体的な理解にも偏りが生じている。その偏りをいかに補っていくかが課題であるが、考古学の成果から導き出される地域間交流の様態を空間レベルとそれぞれの地域社会に対する関係をもとに大別すると次のような整理が可能であろう。

狭域ネットワーク：先文明期以来の地域社会・文化

中域ネットワーク：インダス文明社会

広域ネットワーク：インダス文明社会と西方との関係

狭域ネットワークとは、より頻度の高い日常生活レベルでの人の移動であつたり、それに伴

う人間関係（婚姻・親族関係）、日常消費材の生産・流通などの累積によって築かれる地域社会や文化伝統を意味する。特定の土器によって定義される考古文化はこのレベルに相当するものであろうが、それは共通の生活様式から要請される容器としての土器の一義的機能を満たすために村落単位あるいは複数の村落を包括するレベルでの生産・流通範囲に相当する。また、土器職人間での交流関係の結果共有される製作技術であったり、あるいは消費者の嗜好の結果として土器の形であったりあるいは装飾意匠が決定されるが、一定地域内での頻繁な交流関係の結果、その地域の伝統として一定の製作技術・形態に基づく地域土器様式が成立することになる。もちろん、土器以外の資料に目を向ければ、一定の特徴をもった土器とは異なる範囲で流通する器物や資源があっても不思議ではない。先に述べたように地域社会・文化の一つの資料で画することは現実的ではなく、さまざまな器物・資源の流通範囲を重ねあわせて吟味していくことが必要である。地域土器様式として把握されるのは狭域ネットワークの一つである。

中域ネットワークとしたのは、狭域ネットワーク間によって形成されるもので、インダス文明として私たちが呼んでいるのは、まさにこの中域レベルということになるだろう。当然、狭域ネットワークとの関係でその範囲は異なってくる。インダス文明内部にも中域レベルに位置づけるべきネットワークが存在した可能性があるが（例えばパンジャブ地方西部とパンジャブ地方東部、あるいはシンド地方とグジャラート地方）、そうしたレベルのネットワークを別個のレベルとして確定するところまでは資料が十分でない。

広域ネットワークとして位置づけたのは、ハラッパー式土器やインダス式印章の分布によってインダス文明の範囲が確定されるとすれば、その範囲の外部とインダス文明社会との関係である。メソポタミア、イラン高原、中央アジア、ペルシャ湾岸との関係がそれである。すなわち、異なる中域ネットワークとの関係である。もちろん、現代の領域国家とは異なるであろうから中域ネットワークの縁辺では隣接する中域ネットワークと重なりあうであろう。例えば、バローチスタン高原は、インダス・ネットワークとイラン・ネットワークの中間に位置し、両者を結ぶ役割を果たしている。情勢に応じて隣接するネットワークのうちのどちらかに取り込まれる場合があるだろう。

このように分けてみたのは、インダス文明社会が関係する空間範囲にさまざまなレベルがあり、それぞれのレベルでのネットワークがインダス文明社会に対して影響力をもっていると考えられるためである。その影響力は多様であるが、いずれのレベルにおいてもネットワークの変化はインダス文明社会に変化を生じさせると想定される。例えば、文明後半期にバローチスタン高原南部を中心に成立したクッリ文化は、それ自体は狭域ネットワークに属する地域社会・文化であるが、イラン高原、中央アジア、ペルシャ湾岸に関わって広域ネットワークを形成し、インダス文明社会にも影響を与えた可能性があるのは先に述べた通りである。

逆に中域レベルに位置づけられるインダス文明社会が狭域・広域レベルのネットワークに影

響を及ぼすこともあろう。例えば、文明前半期にインダス文明がアフガニスタン北部のショールトゥガイ遺跡に進出したのは、ラピスラズリという当時の西南アジア世界で広く珍重される資源を掌握するためであり、インダス文明社会が広域ネットワークに関わる上で重要な戦略的資源であったと考えられる。ペルシャ湾岸からメソポタミア本土に進出したインダス系集団も広域ネットワークに関わって活動した人々である。

また、広域ネットワークの変化がインダス文明社会に影響を及ぼすのも事実である。前2千年紀前半のアラビア海交易の衰退がインダス文明社会の広域交流に影響を及ぼしたことはよく知られるところである。それがインダス文明社会の衰退とどのように関連しているかはまた別であろうが、そのインパクトは決して小さなものではなかったであろう。

また、ネットワークは陸、河川、海に設けられた交通路を介して行われたが、例えば地震による陸路の閉鎖であったり、河川の洪水による交通路の遮断、季節風の変化による海上交通の停止など、ネットワークに影響を及ぼす自然要因もさまざまである。それによってさまざまなレベルでのネットワークの切断であったり改変が生じることは必然的である。

狭域から広域までさまざまなネットワークが連鎖的・重層的に重なりあい、それが文明社会の基盤の一つになっていたとすれば、ネットワークの変化は文明社会に対して対応を求めることになるだろう。ネットワークの一部を変えたり補うことで対応が可能な場合には大きな問題とはならないであろうが、ネットワークが復旧不可能なまでに打撃を受ける事態が生じたとすれば結果的には文明社会の衰退をもたらすことになるだろう。

文明末期かもしくは衰退直後には、かつてモヘンジョダロを中心として文明社会の核の一つをなしたシンド地方で遺跡数が激減するという。逆にパンジャーブ地方東部のガッガル平原ではポスト文明期以降も遺跡数の減少はなく、逆に増加する傾向にある。前2千年紀末以降の彩文灰色土器文化期にはその中心となっている。明らかにかつての文明期のネットワークが崩壊し、新たなネットワークが形成されている状況を看とることができる。ネットワークの変化を引き起こした要因が何だったのか、それが実際にどのように旧来のネットワークを解体させ新たなネットワークの形成へと向わせたのか。これらの問いに対しては、単に自然要因からの直接的影響に帰するのではなく、人類社会がどのように自然・人為的要因に対応し、結果的に旧来のネットワークと文明社会の仕組みを捨て、新たな地域社会の形成へと転じさせたのか、そのプロセスを明らかにすることによって初めて何らかの答えを出すことができるであろう。

インダス文明研究の意義

インダス文明社会が人類史の中でもつ意義をどのように位置づけるかという点について筆者なりの展望を示して、本章を締めくくるとしたい。

インダス文明が展開したのはインダス川流域を中心としてその東西の地域を含んだ地域空間

である。先に先文明期に各地に成立した地域社会・文化の多様性を述べたが、それと同じように自然環境もまた多様である。西の乾燥性気候から東の湿潤性気候へと移り変わっていくちょうどその境界付近に位置しており、地形、動植物相も多様性に富んでいる。こうした自然環境の多様性からみれば、地域文化・社会の多様化も必然的といえる。生活の基盤を支える生業体系の系統的な復元にはいまなお分析が十分でないが、ムギ・マメ類からなる冬作物とミレット類を代表とする夏作物が各地の気候・地形・水利環境に応じて栽培・利用されていたことが明らかにされている (Meadow 1996; Fuller and Madella 2002)。コメに関してはさらに分析事例が少ないが、東のガンガー平原では文明期以前に栽培化されていた可能性もあり、文明後半期からポスト文明期には点位的ながらインダス地域にも広がっていくことが確認されている (Glover and Highem 1996)。

ムギ・マメ類は西アジア起源の栽培植物である一方、イネは東のガンガー平原以東で栽培化された植物である。メヘルガル遺跡の調査によって、南アジアにおける農耕の始まりも前7000年頃までさかのぼる可能性が高くなり、その伝播に関してイラン方面との関係が注目されるが、イラン東部およびアフガニスタンにおける調査が十分でないことから、西アジア型栽培植物の拡散経路には不明な点が多い。一方、イネに関してもインド、ウツタル・プラデーシュ州所在のラフラーデーワー遺跡の調査によって、コメの利用が前7000年頃までさかのぼる可能性が指摘されたが、野生種である可能性もあり、完全な栽培化のプロセスが資料によって裏付けられているわけではない。

このように今後検討を要する数多くの問題があるが、栽培植物ひとつをとってみても東西からの人の移動もしくは文化交流の接点がインダス地域であったことがわかる。インダス地域は東西からの文化要素が流入する一方で、独自の文化・文明体系が育まれたところである。インダス文明はまさにそうした東西とのつながりと地域内の社会・文化が相互に関係しあって誕生した文明社会であると想定される。

西方との関係についてみると、インダス地域は西南アジア世界の東縁を形成する地域といっていよう。それは気候のみならず、さまざまな文化要素が西方からインダス地域に流れ込んできたことによっても理解できる。先に記したように、先文明期のバローチスターン高原はイラン世界の一部といっていよう。バローチスターン高原に連なるインダス平原にも高原部に比較すると断片的とはいえイラン系の文化要素が入り込んでいた。

また、文明期にはインダス文明とアラビア半島、さらにはメソポタミア文明の間で交流関係があったことが知られているが、それはアラビア海によってつながれた一つの交流圏の存在を示している。のちの歴史時代においてもアラビア海はそれに面する各地をつなぐ役割を果たしていた。歴史的にみて環アラビア海世界と呼んでよいであろう。そうした世界の形成がインダス文明期にさかのぼることは、この交流圏の歴史的重要性を物語っている。

このように西南アジア世界の一部としてインダス地域を位置づけると、インダス文明社会の盛衰を考える上で、西方との関係がいかに重要か明らかになるだろう。文明社会の形成過程については、インダス地域内の自律的發展を強調する説と西方からの影響を強く見積もる説があるが、イラン世界や環アラビア海世界、さらにはインダス東方の世界など、さまざまな世界が交錯するところにインダス文明社会が成立したことを念頭に置けば、成立と展開、さらには衰退にかけての文明社会の変転にはさまざまな世界に発する要因が関わっているとみるべきであろう。

文明期もしくは先文明期における東方のガンガー平原やインド半島とインダス地域の関係はまったくといってよいほど不明である。上述のラフラーデーワー遺跡で凍石製ビーズが出土するなど、インダス文明社会とガンガー平原の交流関係を示す資料も断片的に存在しているが、不明な点が多い。インダス地域と東方地域との関係が重要性を帯びてくるのは文明社会の衰退後、すなわちポスト文明期である。

インダス文明社会の衰退要因には、洪水説や地殻変動説といった自然環境の変化を重視する説と、疫病説や西方との交易の途絶説といった人為的要因を考える説などさまざまだが、その衰退のプロセスも決して明らかになっているとはいえない現状では、要因の解明には程遠い状況にある。現状で確認できるのは、上述のようにポスト文明期に遺跡の分布が東方のガンガル平原やグジャラート地方に大きく偏り、既存の都市が段階的にせよ廃絶していく状況である。

こうしたインダス文明社会の衰退は、エジプトやメソポタミアと比較したとき、興味深い歴史事象として評価することができる。前2千年紀には西南アジア世界全体を覆って社会変動が生じているが、完全に文明社会のシステムが途絶することになったのはインダス文明のみである。したがって、インダス文明の研究によって古代文明社会が拠って立つ基盤やその特質を明らかにすることが期待される。どのような歴史的背景あるいは条件のもとで文明社会が成立し、どういったときに文明社会が崩壊するのか、自然要因にせよ人為要因にせよ、広く人類史の視点から重要な研究課題である。インダス文明社会の衰退はそうした文明衰退の一つの事例として、他地域との比較研究にきわめて大きな意味をもつであろう。

そのためには前節で述べたように、広狭さまざまなレベルからインダス文明社会の構成要素とそれを取り巻く社会・文化的環境を明らかにし、それぞれが文明社会の盛衰にもたらした影響を評価していくことが求められるであろう。さらには、のちの時代の歴史事象との比較によってインダス文明そのものの理解のみならず、インダス文明期に形成された地域間関係やそれに拠って立つ社会・文化的世界、生活技術伝統など、さまざまな歴史的・地域特性がその後の時代にどのように継承され、変化していったのか理解することは、南アジア世界におけるインダス文明の意義をも明らかにすることにもつながるであろう。

【引用・参考文献】

- Ajithprasad, P. (2002) "The Pre-Harappan Cultures of Gujarat", in S. Settar and Ravi Korisetar (eds.) *Indian Archaeology in Retrospect vol.I: Prehistory*. ICHR/Manohar, New Delhi. pp. 129-158.
- Bhan, K.K., M. Vidale and J.M. Kenoyer (1994) Harappan Technology: Theoretical and Methodological Issues. *Man and Environment* 19(1-2): 141-157.
- Bhan, K.K., M. Vidale and J.M. Kenoyer (2002) "Some Important Aspects of the Harappan Technological Tradition", in S.Settar and Ravi Korisetar (eds.) *Indian Archaeology in Retrospect: Protohistory*. ICHR/Manohar, New Delhi. pp.223-271.
- Chakrabarti, D.K. (1988) *A history of Indian Archaeology from the beginning to 1947*. Munshiram Manoharlal, New Delhi.
- Dangi, V. (2009) "Recent exploration in the Chautang Basin (Jind District, Haryana)", in T. Osada and A. Uesugi (eds.) *Occasional Paper 9: Linguistics, Archaeology and the Human Past*. Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto. pp.73-163.
- Fuller, D.Q. and M. Madella (2002) "Issues in Harappan Archaeobotany: Retrospect and Prospect", in S. Settar and Ravi Korisetar (eds.) *Indian Archaeology in Retrospect vol.II: Protohistory*. ICHR/Manohar, New Delhi. pp.317-390.
- Ghosh, A. (1948) Taxila (Sirkap), 1944-45. *Ancient India* 4: 41-84.
- Ghosh, A and K.C. Panigrahi (1946) Pottery from Ahichchhatra (U.P.). *Ancient India* 1: 37-59.
- Glover, I.C. and C.F.W. Highem (1996) "New evidence for early rice cultivation in South, Southeast and East Asia", in D.R. Harris (ed.) *The Origins and Spread of Agriculture and Pastoralism in Eurasia*. UCL Press, London. pp.413-441..
- Jarrige, J.-F. (1985) "Continuity and Change in the Northern Kachi Plain (Baluchistan, Pakistan) at the Beginning of the Second Millennium B.C.", in J. Schotmans and M. Taddei (eds.) *South Asian Archaeology 1983*. Istituto Universitario Orientale, Naples. pp.35-68.
- Jarrige, J.-F. (1993) "The Question of the Beginning of the Mature Harappan Civilization as Seen from Nausharo Excavations", in A. Gail and G.J.D. Mevissen (eds.) *South Asian Archaeology 1991*. Franz Steiner Verlag, Stuttgart. pp.149-164.
- Jarrige, J.-F. (1994) "The final phase of the Indus occupation at Nausharo and its connection with the following cultural complex of Mehrgarh VIII", in A. Parpola and P. Koskikallio (eds.) *South Asian Archaeology 1993*. Suomalainen Tiedekatemia, Helsinki. pp.295-313.
- Khan, F.A. (1965) Excavations at Kot Diji. *Pakistan Archaeology* 2: 13-85.
- Marshall, J.H. (1951) *Taxila: an illustrated account of archaeological excavations carried out at Taxila under the orders of the Government of India between the years 1913 and 1934*, vols.1-3. Cambridge University Press, London.
- Meadow, R. (1996) "The origins and spread of agriculture and pastoralism in northwestern South Asia", in D.R. Harris (ed.) *The Origins and Spread of Agriculture and Pastoralism in Eurasia*. UCL Press, London. pp.390-412.
- Mughal, M.R. (1970) *The Early Harappan Period in the Greater Indus Valley and Northern Baluchistan*. Unpublished Ph.D Dissertation. University of Pennsylvania, Philadelphia.
- Pracchia, S. (1985) Excavations of a Bronze Age ceramic manufacturing area at Lal Shah, Mehrgarh. *East and West* 35(1-4): 458-

468.

Possehl, G.L. (1999) *Indus Age: The Beginnings*. The Museum of Pennsylvania University Press, Pennsylvania.

Possehl, G.L. and C.F. Herman (1990) “The Sorath Harappan: A New Regional Manifestation of the Indus Urban Phase”, in M. Taddei (ed.) *South Asian Archaeology 1987*. IsMEO, Rome. pp.295-319.

Quivron, G. (2000) The Evolution on the Mature Indus Pottery Style in the Light of the Excavations at Nausharo, Pakistan. *East and West* 50(1-4): 147-190.

Sharma, Y.D. (1982) “Harappan Complex on the Sutlej (India)”, in G.L. Possehl (ed.) *Harappan Civilization: A Contemporary Perspective*. Oxford IBH and the American Institute of Indian Studies, New Delhi. pp.141-165.

Shinde, V., T. Osada, Manmohan Kumar and A. Uesugi (2008) “A Report on Excavations at Farmana 2007-08”, in T. Osada and A. Uesugi (eds.) *Occasional Paper 6: Linguistics, Archaeology and the Human Past*. Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto. pp.1-116..

Thapar, B.K. (1975) Kalibangan: a Harappan metropolis beyond the Indus valley. *Expedition* 17(2): 19-32.

Tosi, M. (1979) “The Proto-urban Cultures of Eastern Iran and the Indus Civilization. Notes and Suggestions for a Spatio-temporal Frame to Study the Early Relations between India and Iran”, in *South Asian Archaeology 1977*. Istituto Universitario Orientale, Naples. pp.149-171.

Vidale, M. (2000) *The Archaeology of Indus Crafts - Indus Craftspeople and Why We study Them*. ISIAO, Rome.

Vidale, M., J.M. Kenoyer and K.K. Bhan (1993) “Ethnoarchaeological Excavations of the Bead Making Workshops of Khambhat: A View from beneath the Floors”, in A. Gail and G.J.D. Mevissen (eds.) *South Asian Archaeology 1991*. Franz Steiner Verlag, Stuttgart. pp.273-287.

上杉彰紀 (2008a) 「インダス文明社会の成立と展開—地域間交流の視点から—」『古代文化』60(2): 111-120.

上杉彰紀 (2008b) 「インダス・プロジェクトによるインダス遺跡の発掘調査」『環境変化とインダス文明 2007 年度成果報告書』総合地球環境学研究所・インダスプロジェクト、83-114 頁.

上杉彰紀 (2009) 「ガッガル平原における先・原史文化の変遷」『環境変化とインダス文明 2008 年度成果報告書』総合地球環境学研究所・インダスプロジェクト、75-102 頁.

上杉彰紀・小茄子川歩 (2008) 「インダス文明社会の成立と展開に関する一考察—彩文土器の編年を手掛りとして—」『西アジア考古学』9: 101-118.